歴とわ末

宇治巻　五

并を名とせり

[V. 49]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 49
copy 1
Asian
Japan
cage

LIBRARY OF CONGRESS

2804551302

芸亦二女の夜ち亦三女の四月まで書
そのころ藤つぼと男ゆりは右大臣殿の女御に
なんおりしけり。まぶ今上 長宮と男九させし時。人より
さきにまいり給ひしかば。むつましうしられなり
るのれせひへことに抱し給めれど。そしきしと
ゝゆりふしもなくてとしへ給ふ。中 明石ノ 宮にハ宮たち
さへあまるこゝらおとなび給めるに。さやうれとも
すくなくて。ただ女 女つぼノ 宮一所 女二之 をぞもちなりみへりける。
けがいとくちおしう人にをされてまつりぬる
すきなげしくおぼゆるりに。これこそやを
ぶまいりでし来のころもなぐさむばかりにて。
こなんとうしづきこさて給ことをろかなるぞ。

れうちもいとおかしくおもすれば、今上みどもらう
うさ和におもひきこえさせぬへり。女一宮を世に
さぐひなきさ夜にもてかしづき罪えさせ給ふ。おほ
うさの世の見えこそをよぶべうもあらぬ。荻つぶりうちくの
れたりさ夜もおさくをとゝぶ。ちくおさゞのれいき
ほひいかしうりしなぞりいうくおとろへねば。
とにこころもとなきことなどなくて。さふしふ
人ごのなりすぐるよりいじめらゆゑなく時にに
つけつゝさくのへこのこそいまめかしくゆへく志
きさ夜にもてなしぬへり。十四女二になり給とし。
れもぎをさそまつり給ちんとて。長よりうちりじ

めてごとくなくおぼしいそぎてなまごともなんべ
てなしぬさ夜まとおぼしまふくいましへよりつる
ちりうりけうこうしもれどもこれなりまこそいとさ
ぐ出つ。いうじくいとなる話は女れ（右ツガ）夜ごろもれて
けよいづらひなて。いとちうなくうきなぬいふひ
なく口おしきことせう（今上）へまもおぼしなげく。こうろ（右ツガノ）
ぢへなさけくしく。なつしきあおちしいるれ
うこなれば。うへ人ども。うよなくさうぐしうるべき
いぎうなとおしミ男も。おほうくさうまじ北きいの
女皮（くりん）などまで思ひ男もぬいなし。家（女二）いましていつき
れ心ちは。心ぼそううなしくおぼしいりうろを。こうろ（今上ノ）

めして心ぐるしく衣(あれ)をあげしめさるれば此四十九
日ゐるまくに遊(しのび)てまつらせ(今上ハ女二を)なしせめへり。目ごな(今上ノ女二ハ)
けたらせ給つゝそまつらせ給。ゑろき(女二ノ)れぞ
やつれておしすさ庵いとゞらしげなあてなる
かしき庵さりめへり此心ざ庵もいとよくおとなび
なて。母女此よりも。今すこしまげやかなをもりかな
ゐ氣色のまさりめへる後。うしろやすくハとゝて
まつらせめへど。まことに度此母方とてもうしろ
ことゝこれませめべきをぢなどやうのたゞしきさ
人もなし。けづらに大(なつがノ兄才之)蔵にすりのうとなどいふも
女(な)此まもことゝかゝぬなり。ことに世のあげしをもり

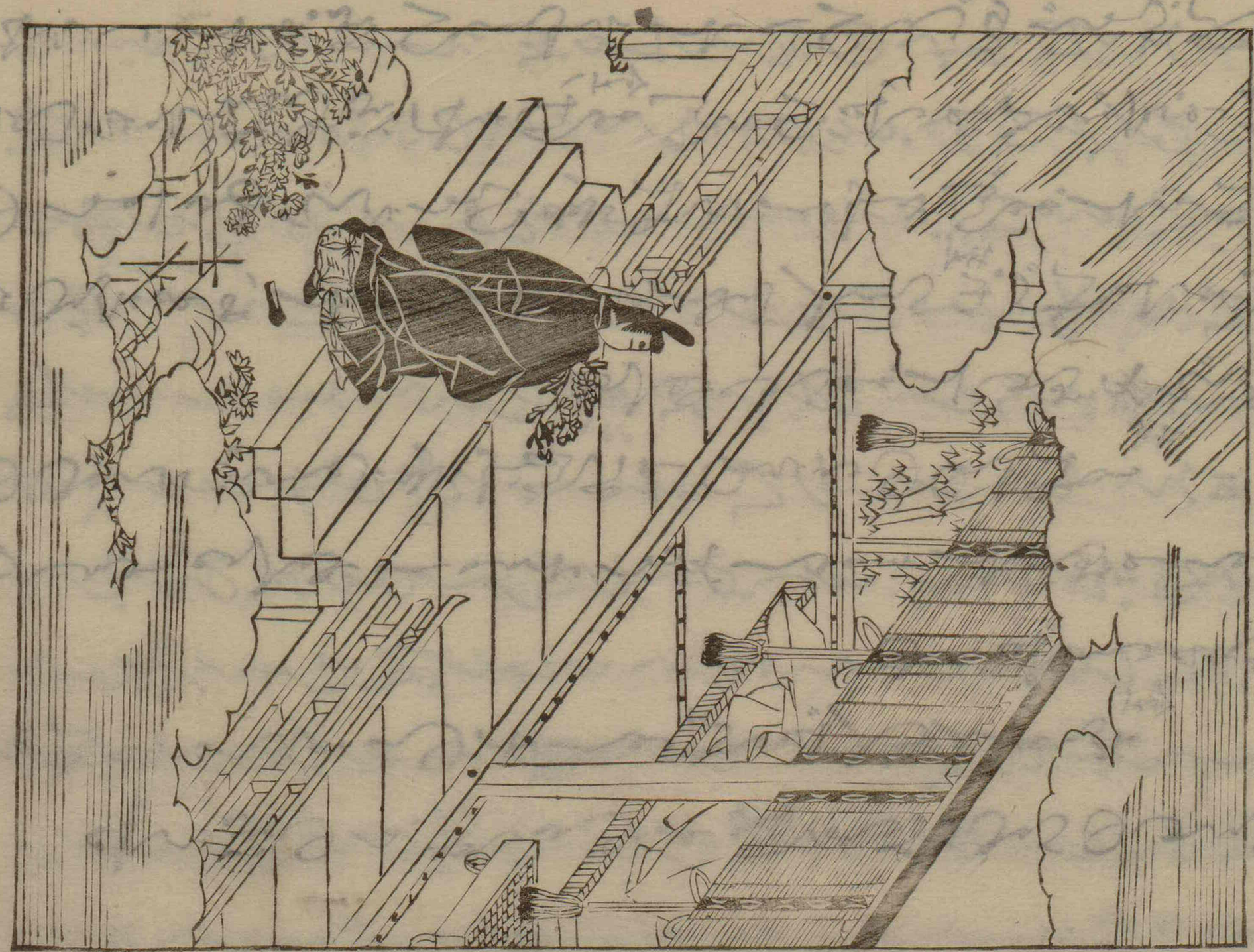
なまもあらずやんごとなからぬ人ぐをこれもしぐ
まてもおし給ふんも。女はこころぐるしさことあほ
りぬべきこそいとおしけれなど。今上ノ御こころひとろ
なるやうにおぼしあつかふもやすらざりけり。
おまへの菓うけろひとてくさりなるころ。そらの
氣色も衣にうち時雨なるにも。まづこれ女二御るに今上ノ
らせぬて。君のことなどこそこそさせ給に。女二ノ御いらへ
などもおほとろなるもれからいとけなからずうち
罪しさせ給をうけ今上ノ心罪しさせ給。かやうなり
御さ夜をこしつまぬべうらん人の。まてもやし罪しん
もなどうけあらざらん。朱雀院の姫女三家を。六条院に

ゆづりきこえ給しおりのさだめどもなどおぼし
出るに。しばしハいでやあかずもあるかな。（女三ノ宮）さらでも
おはしなましときこゆることどもありしかど。
（薫）源中納言の人よりことなる有さまにて。かく
よろづをうしろみたてまつるにこそ。そのかみの
御おぼえおとろへず。やむごとなきさまにてハながらへ
給めれ。さらずハ御心よりほかなることども出
きて。おのづから人にかろめられ給こともやあらま
し。などおぼしつゞけて。ともかくも御らんずる
世にや。思ひさだめましとおぼしよるにハ。やがてその（女二を女三のごとくに）
ついでのまゝに。此（薫）中納言よりほかによろしか

べき人まゝなりやり。宮たちのれうにはさし
なるべきたんにおなまじともめざ後たくはあらじを。
もとよりおもふ人もたりとて。さくにくきことなど
うちまずまじうゝ。あめりをつゐにはさやう乃
ことなくてしもえあらじ。さらぬさきにさもや
ほのめしてましなどおりくおぼしめしやり。
れ碁(ご)などうたせ(女二と)給。くれゆくまゝにさぶれおりしき
ほどに。菊の色も夕ばへしたる紙ゆらんじて。人
めしてこゝいま(今上詞)爲ぶにまたれくゝとさもを給に。
中づかさのこゝ(今上ノ内子ニ)うんづけのこゝ(系帰ニ見ヘ)中納言(菫)みなもとの
あそんさふふとそうす。中納言(今上詞)のあそんこゝなる

まとおほきごとありて。葉(蓋)りのへり。げまかくさり
けきてめし。世方もかひありて。とまくかれり白ひ
よりもじめ。人まことなるさ庵しのへり。今上詞 かふ世ん
しぶれつ事よりことまのどかなる紙。おそびなど
すき庵ぞきかるまて。いとつれぐなるを。いるづら
ま日をくらふ。こそふれまても。これなんよろべき
とて。碁(ご)ぞんめしいでく。此碁(ご)のうるまめしよす。
いづれ(蓋ん)もかやうまけぢかくなりしまけもし給ま
なしひまれば。さまこそもとせふま。今上詞 よきのり(女二ノ事ヲ)物も
けりぬべかれど。かかぐしきくはえつるす まじ云紙。
ちまを(蓋ハ)かはなどの給もする。此かしきいかぐ

らんいとぐ心づかひしてさふらひ給さてうたせ
給ふ三ぢんよりずひとりまけさせ給ぬねたさワぎ
かれとてまづかふもこれ茶ひとえぶゆうすとの
給たすれば此いらへ罪てさきでありておもしろさ
えぶとありてまいりぬへり
茶 よれつまのうきまにほふ茶ちからがこころの
まゝよありてミましをとそうしぬへるようい
あさかしずこゝ
今上 しもよあへずかれましそのくさくなれど
のうりのいろハおりを浸もあるかれどの給ふす



蓋ん
うやうまありく間のめりさせ給れりしきを。人がそ
ちまらずうけ給ちまづら。例の心のくせなれば。いそがし
くしもおぼしず。いでや問いまもあらず。さ後ぐま
いとあしき人ぐの（蓋をしこませんとこれも云ふなるを云こ）れことぐもとも。よくきこ通く
けてさへぬる紙。いまさらまひぢりやうのもれ。世
まうりいでん四ちすべきことくおもふも。かけも
あやまちや。ことさらに心をつくす人ぞまこそあるれ
とはさひちまづら。女ニ（ノ）姑がしまおもちまば。しもとおぼゆる
心のうちぞおまりおぼけるりけり。かゝるかことも紙
左大（タん）臣殿間の御文なて。六の君はさりとも此君まこ
そハまぶくちまりもまめやかまうしこゝらばつねまは

えいなびもそじとおぼしつるを。さひの月かなり
といでさぬべかなりと。ねたくおぼされれど。
白 菩提の家もたゞ。けざとはあしほどおりくは
つけて。六宗の白ノおりしさき南まさえて給ことこえざり
それがさぞれなる代ざりの此すきまはありとも。さか
べきまて此こゝろとまかやうもなどかなりしん。こゝ
もかましうおもひさぶむとてもなをくしさ
きはまくだんもたゞ。いと人けくあぬこゝろ
すべしなどおぼしなりまたり。女でうしろめて
けなり世の果まて。今上ことかどざまむこまとめ給めか
世まましてこゝ人のさかりすぎんもあいなし

こゝめりとも。かれらが。あまりにもふかくりんゐ
なげくあらんなど。例ならずことづけて。おほんべ
しうさいし給ふ。いづれころもとも。もとより
もてはやされてとゝ。あはれなることもあれば。おかがら
まいるがてりは。あつまりごとに宮も兄こそ給はん
さうどもとうとしげなりあそびに。こゝちこめ
られて。こゝろやすくおもひかへりては宮の御事を
うらんとや思ふ宮ぐるしくおぼすに。拙うきこゆれど。
げにこれおとゞに。おもひゐんぜられもてんもあい
なりんなかば。やうくおぼしよりようさうなすら
べし。おぼえなかりけることなれば。かれ按察(あぜち)の大納言(柏木ノおとゝ)の。

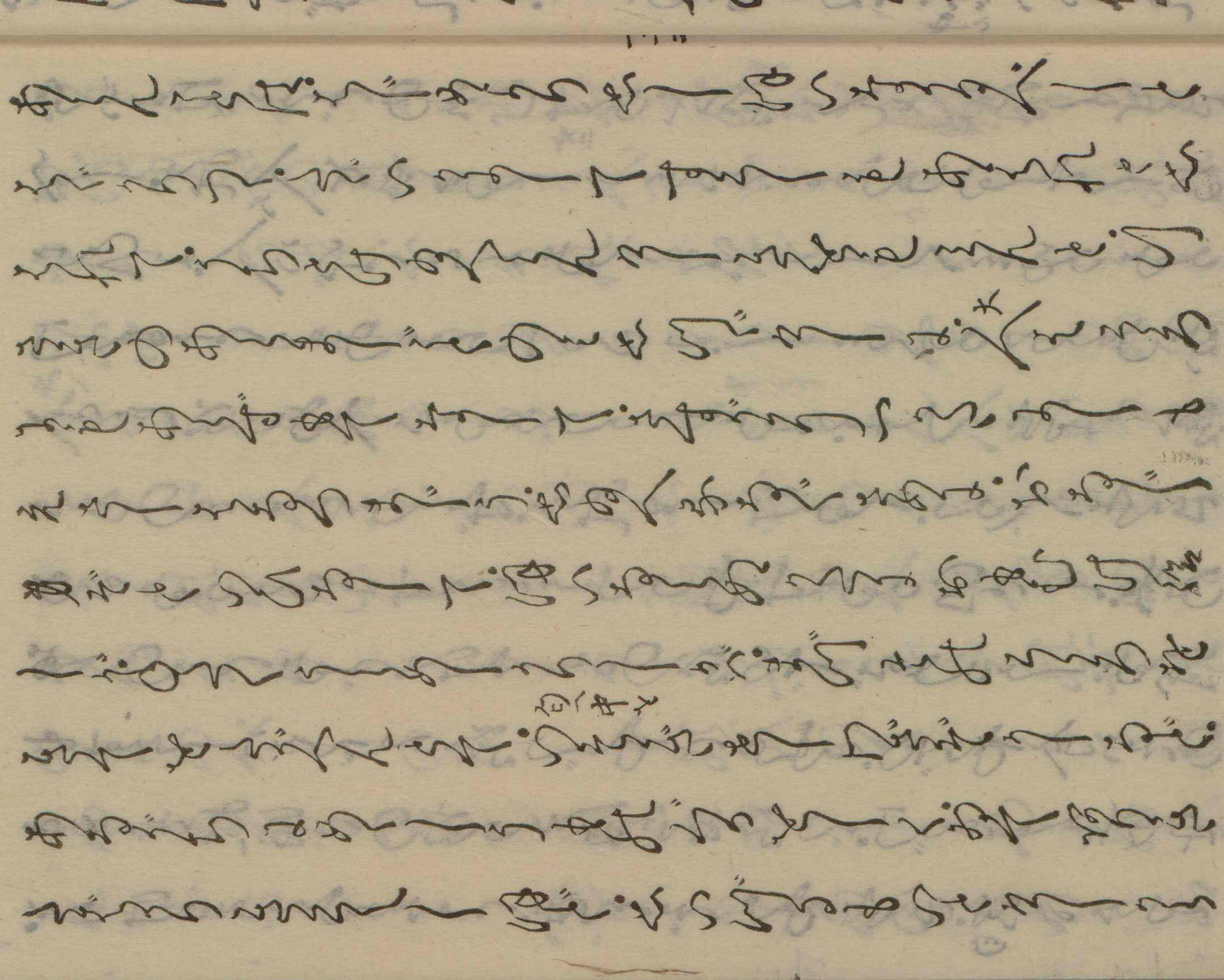
さうだいのれうにせもちをあぼしさず。芳江葉に
つけてものなひつきりつ。いづれをもゆりしうし
あぼされやりされどそれせしいかりぬ。女二の家
もれぶくちてぬれがいとぐるまごとよろはちぐり
つま給いん。さもこそいでだとあぼしめしさる
れなしこそまちんと。つげこそゆう人ぐもあるは。
あまりしらずがほなるんもひがくしう。なすめげ
なりなどあぼしとそして。さるべきさまりして
なしこそぐこそこそし給ありくもあるは。他しさるさ
やうはなどてかはあらん。それほどるあぼしさぐめ
さるりと。つてまもこそ。こげからは氣色をもこれど。

こころのうちにはなほあるですぐ語ましひ大とれ
かるしされ。ひすしろべき世なく光ゆれば。うたて
くちぐりゆく抱し給けりひとれ。なぞてかはさ
すがにうたくてはすぐるけんと。心光がらくなもひ
出ろ。ほかしきしるくつもれ。かれ有様にすてしも
なぼしこんん人も。心もとまるもなんし。苦ゆりけん
うのけゆりにけて。ぐる。今一たびこえてまつり
もれにもがれとのこなぼて。やむごとなきなる
ぎ夜にいけしかたすぐはいそぐこころもなし。右夕
のなほいとのにはいそぎこちて。八月ぐらりにと
こそしなてぐり。二葉院のこいのれかなまはこそ

ぬふる。中仏 されどよいかでかはかずなすらぬありさ海か
めれば。りなすらず人はけんへりうきことと出こん物ぞ
とは。むふくるしつる世ぞかし。あぐさなりれこころと
きこはうりしを。これもしげなくむひなから。めな
ちくてはことよりしげなりこともえしず。あれれり
ふりき鉄をのこ志給へる紙。よもうまりなりけるん
ほど。いりぐはやすき心ちはすべからん。さて人のなすり
らひなどのやうよ。いとしもなぐりなくなすどは何
らずとも。いりまやすげなきことあほりらん。なる紙
いとうき身なるめれば。つぬまは山ずこまり無りべき
なありなどあぼすまもやがてあとさしなまし

よりハ山がけのまちむたんもひとつへなりかし
遠くもこ八家のく給をさしことごひてくさの
もとをかれにけりむろがなき後ぞしうもけら
くもむひむられ給こ大姫君のいとむどけなく抱きり
なきさ後にのこなるごとをもなげしの給しかど
こころのそこのづしやかなり所ハこゝまるくもおりし
けりれ中芸納言の君の今につすらべき世なく
なげきつゝり給めれど もし世にかもせましかば
又かやうになげすとハ省りやせまし それをいと
ゆういかぞさはあしじとさひいりぬてとき後
かうさ後にもてもなれんことをなげしてかうら

いとおしくおぼされて。さもの給はぬを。女（中ん）君はそれ
さへぞ心うくおぼし給。志のびたることもあらず。
世中なべて志りたること給。そのほどなどごまの給
はぬことくいかでうしあしからざらん。うくつたり給
まし後はことなることなれば。うち（白ノ）まいり
ぬるてもよろとまることはことまし給はず。つくり
しこれはよがれなどもなりけり給。にはかり
いかに志給はんとこころぐるしきまぎらはしり。
これば時ぐれ飯升とて。まいりなどし給けり。
かゝてよりなりけり。四九し給ともこゝつきたる
のみぞ志せられぬべき。中納（芸ん）言飯もいとくおしき



よれくハ。たゞなるさ風のととまもめれ。こさめ川。
ましうさりさきれ人のうへさ人。なぢきなるさ世
をしひめづし給。なげのすさこゝ抱をもいひ
ゆれ。けぢくつひなるし給人ぐの中にハ。どの
づゝにくゝぞおぼさるくもありぬべかれど。風こ
とまはこゝろとゝ風もなるきこそさはやかなれ。
さるハかれ（宇治ノ姫君をゐし）君ぐちのほどなどとるまじこさ。ハの
人ぐも。とゝさ世にしこゝぐひつゝおとろ人て。心ぼそげ
なるすまゐするなどをこゝぐ。きりけゝあらせな
ど。いとおほかれど。今ハと世にそむきたるれん
とき。此人（中）をそそとりこそて。心とまるほどしになる

ぢりのことはなくて、ゆしてんと思ふころづひ
かくましをいでさもいろく、我ころなどもぢけ
てもあるかなくどうしよりもやがてまどろまず、
あしぬへるあしたは、雪のまがさより、菜の気く
おもしろくしいたる中は、おさがれのちれげは
てまじまたる紙、行ことはめとあるこちし給、
おんなまさきてとうしなさ世ともちすしふるが、
ころぐるしさるめりうしもあげなるがら、
いとうそめなうちふしつゝあしぬへだ、此菜志
ひらふる程もしだひとりのこそ給けるへめして、
菜何
小の俤はまいらんはことくしうしぬ車さし

出させよとの給へば、白やは門者ノ詞唯日よりうちまゐん
おりしますなるよ。よべは車ゐてくへり侍ようさと
ゆ。芝詞さぐれかれ蓋(しい)のれ中るのなやこ給なるとふ
ちひきてしん。けふはうちまいるべき日なれば日
さけぬさきにとのゐて。れさうぞくし給いで給
まゝに。おりて菜の中にまじりまゐるれさ殿も。
こしさしまえんぐち色めさてもくてなし給はひ
どおやさうぐうちうちにお殿めしうそづしげ
まて。いうじうさしさぐう色これこどもにおずふ
べくもあらず。とのげりしおかしうぞこそし給けり。
給がれとひきよをまゐまゐ。つもいうこげる

堂 けさのまれ色にやめぞんとく家のさてぬに
かろ茶とうろく。たれなどひとりごちて。おり
ても給へり。をこれへしをばこすぎてぞいで給ぬ。
明たちまくまくに。さりしちぞなく宅おしさ
に。二条院ノ 堂ム 兵どちはどけるくあさいしぬへらんうし。うう
しけまどなどうちしてきこはづくらんしそうぬく
しかるべきれ。朝まぐさ。まぐさきなまかりとしな
がら。人めして。中門のあさたちよりこせぬへど。
こうしどもこれ。ありて給べし。女なのけりひ
ちどし給りつとやをば。おりてきりのまざれに
さ雨よくあゆいりぬへる紙。匂 家の悪びたちとも

ちりかへりぬへるまやとこゝろ（内ノ今）ゝ面まうち志めり
ぬへるなり例のいとさ面ことゝ白ひくれば（ち）ゝ紙
めざ面しうおもすし心をあまりおさめ給ふ
とそまくくれなどおひなくつゝさ人ごなどい覚
あへりおどろさがほまもあらず（よき）程まけそな
めさて（れ）志ゝ（ゝ）さしぬるどすゝさ面もいとめやすし
（蕉詞）これまさふへとゆゝさせ給ほどいへぐしさ心ち
すれどなほかゝ（ゝ）すれまへまさしちゝ（ゝ）せ給
へるうれしさるなん志ぞくもえさふゝちぬと
のぬへばさしばいかばいかゝんとこさし（地）ゝ
おもてなどやうのくれぞうし（蕉詞）うなふりびと

おもてなどやうのかれぞかし。うらなかゝひと

などのさゝふこんまことなりなるやすこどころは
それもまゝらぬぐれ心なれば。うれへさしもべきなも
侍らずとてなげしまをしうりてなかすれば。例の
人ぐ行ありしこまとまなどそぐのし。四月。蓋ノ。とより
けさひもやまるまおくしくなどは抱し給ふぬ
人がらなる紙。いふくしあやうまもてなしおさめ
えれば。中ノ。いまはこゞからさて給ことも。やうく
うこそつましうしうふ。すこしづうすらざて
おもなれ給ふり。蓋ノ。なやましうおぼさるらんさ海も
いかなれば。などとひ四月のへど。中。ちうぐしくも
れいしへさて給ふず。蓋ん。つ。よりもしあり給へ。

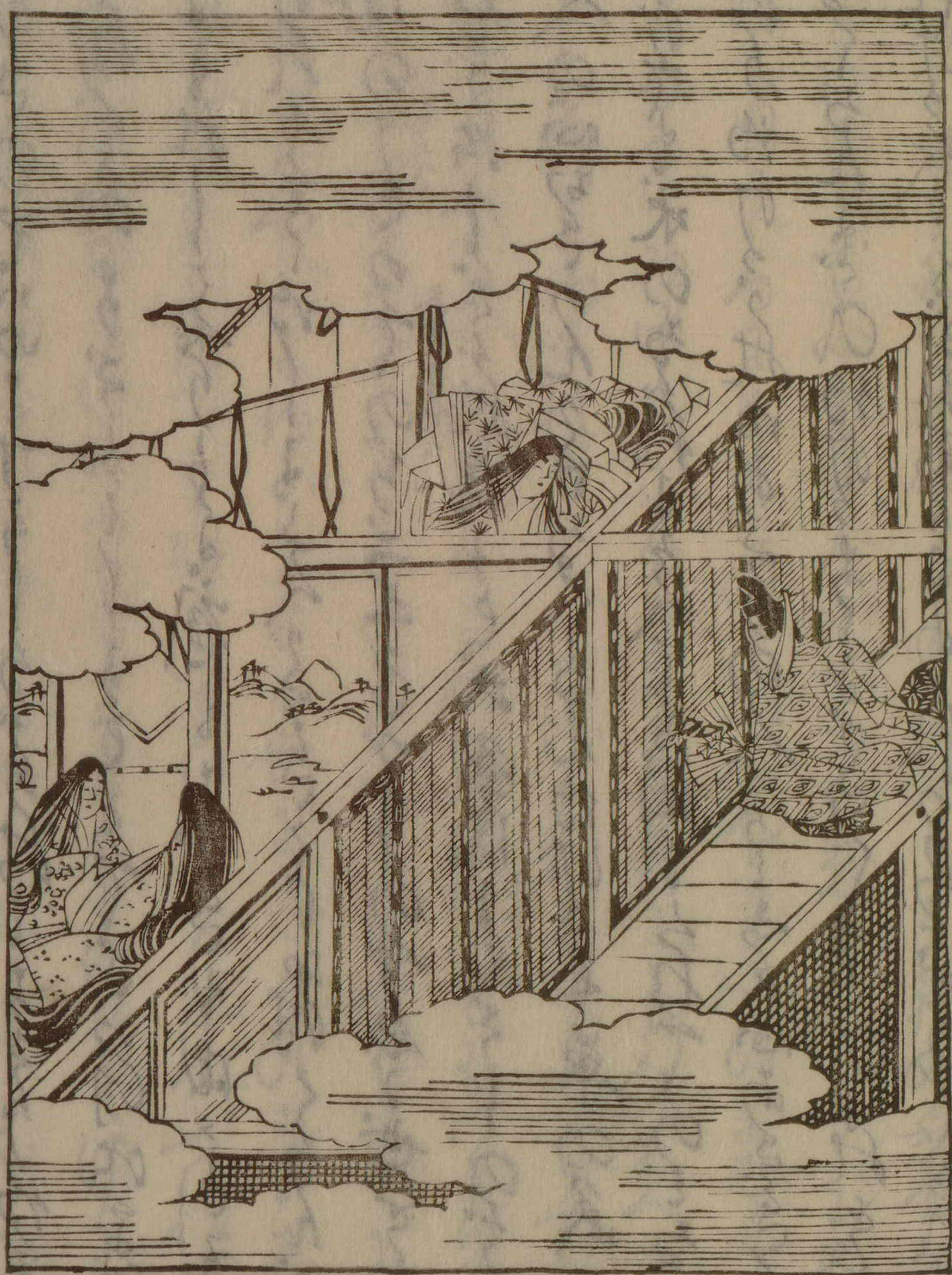
りしされ心ぐるしくて衰ことをしたうられぬて。
こ夜やうな世中のあるべきやうなどをいらうら
やうのもれてあしましやうにとしへなぐさめ寄て
給。声などもつぎとしよめんりともおぼしざりし
かどにあやしさまでこそそれとのこおぼゆるる。
ひとめこぐるしうまじういすぐれもひきわけて。
きしむひさてまほしくうちなやこのへんん
うちゆしう見て給もなほ世中は抱しさぬひ
ともえあるまじきわざにやあんんとぞ。心しられ
給。人(詞)ぐしくさしくしさるにはなしずとも。
こころにおもふことあり。なげしく身をもらく

ころよおもふことありなけしく身をもらく

なやむさ夜になどはなくて。をしのべきこれ世と。
ぞうしきひゆへし紙心からうるしきことをおこ
がましくぞやきさ抱おもひをもうるぐるやを
うぎきひ仰ることていとあいなきれつき位など
いひて大事にすめることとりのうれへにつけて。
なげきをふ人よりもこれやいますうしつこれふさ
もまさるもんなどいひつ。おりに海へるもなほ。
あふぎまうちをさてこゝねゆへるがやうくあるこ
もてゆくもなかく女のあもひあしうこゆれど。
やをしさしいれて

葉 よそへてもこうべかりかりしき露のちぎりゥ

をさし物がほの茶ことさしびてしも也て
ちさぬる露をおとさでもたまへりけるよとおう
しくこゆるをさるがうるく氣色なれば
中 きしぬまゝれぬる茶のもうるきをくるく
つゐにちぼぞまされるなまくうれつとゆとされ
ひてともつゞけず。けてましげまいひけるなる
ほどちぼいとよくまぬへるうれとさふまも。由
げぞうるしさ



蓋付
あきの色はいますうしなびあれはまきり侍る。
つれぐのまぎらはしまもとて。さいけ比字治
まもれしとぐりしる。蓋もまぐさも由ことり
あれはそく侍しまゝへがたきことあほくなん。こ
源院のうきぬてのち。二三ノ年げりのすゑ世をそ
むき給し。さが院（大覚寺をおく）まも。六条院まもさしのぞく
人の心おきめんなくなくなん侍けり。其単の文は
つけても。水のながれまゝへても。泪まれてのゝなん
なり侍けり。かれ此あたりの人はかゝしも心あきさ人
なくなんまどひ侍けりまくまゝ。つゞひもれをら
れけり人々も。これ所ぐまあがれちりつゝ。をのく心ひも

なるくすまねせし給めりしに、いうちまき程の母家な
どうに、まして心おさめんくるなく見てけりまくに、地
おぼしぬこころにまかせけり、山もやしにけまぢり、
すごろなるね中べになりなど、衣にまどひあへる
こそおほく侍れ、さてなほこれあくしもて、
志単おふ志て後なん、これ左のおとゞもつたり
すこ、ぶ（明石中ニヌリ）こちなどもくるべもれしめへぞ、きるに
くりこるやうに侍るめり、さる世にさぐひなるさ
なるしさとこ給へしほどのことも、そし月かれば、
せひさ海寺ありの出くるまこそいとこ侍るに、げに
かぎりあるけぎなりとなんこそ侍し、うくも

きこしさせたるぞらも。れいはしへのかたしさは
まぐいたけなく侍けるほどまて。いとさしもしまぬ
まや侍けん。行これちりき夏（大ノ夏）こそさますべきうる
なくさひのへくりくいおたるじごと。世のつゐなき
うるしひなれど。つゝみかきかるはまさりて侍か
まやと。それさへなん心うく侍とて。ないのへるさ夜い
と心ふかげなり。むかしの人（大）といとしもおもひ寄て
ざらん人ごま。これ人（業）のさのへるはかしこき紙えん
まはすぐろまこぐまもあるまじき紙まいて（中心）我も
物を心ぼそくおもひこぐれ給まつけてとゝいとぐ
つねよりもおもひげまを遣しくかるしくさこそて

給心なれば今すこしまほされて地もえきこし給
まずざめしひなるけるひをうこゝまいと
衰とおもひかくし給世のうきよりはなどひとも
いひしをもさやうまさひくらづろうろもことま
なくてさしごろまずくし給しをいまなん程いかで
しげかるさ海までも過さ海ほしくしなみなを
さすがに心まもかれはざめれば年のあまこそうら
やましく給れこれ廿日(八ノ忌日をさし)おまりのほどはかれちかき
寺の積(かね)のこゑもきくはるさ海ほしくおぼし給る後
悪びてはるさせ給てんやと罪しさせざやとなん也
給けるとのあへばおらさじ(甚詞)とおもほすともいかで

ぞちらうことぐをきえて給。經佛などこのうへ（中心）
もろやうじのべきなるありうやうなりついでまことに
つけてやをうてもりねなぞやとおもむけのへる
々しきなれば（薬詞）いとあるまじきことなり。れなるまぞ
も心のどうるをあぼしなせなどをしへ罪て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば（薬心）何まりなが
ねもとありがなるんまより。いで給なんとて。
いづこまでもうすれとまはなるひ給はれば。はし
さなきぬち志給てなん。いま又かやうまもさふら
ちんとてこちなぬ。（白）家のなぞ（薬心）なるきありまいさ
らんとせひのひぬべきれ心なりもいづらりしくて。

さふらひのべさうなり。右京のをめして。よべ（蕙詞）まうで
させ給ぬと承（うけ毎）とりてまいりけるを。おもし海さ
ぬほどなりなればくちおしき紙うちよやまいり
べきとのゐへだ。ゆふ（右京詞）はまうでさせたまひなんと
ゆきばさしバ（蕙詞）夕つゝもとて出ぬぬ。ぢ（ん）紙これ（中）
れけるひなりさ海をさ給さびどよ。おどて芳の
人（大）の中心をさてをもてたゞへて。さひぐまなり
けんとくゆり心のこまきりゆけば。ちぞや人やま
なしぬ心なしんとおもひへし給。そのまゝ（蕙ノ地）
いまゞさうじまて（大宮殿之）いとゞをとなひをのこし給
ひ。おしくし給。をくなめ（女三）なる紙いとけく

ぶちうちうちぐをとこそして給。經佛などこのうへ（中ん）
もろやうじのべきなめり。かやうなりついでまこと
つけて。やをうてもりねなどやとおもむけのへる
くしきなれば。いと（蓋詞）あるまじきことなり。れなまぐ
も心のどうまをおぼしなせなどをしへ罪て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば。何（蓋ん）まりなが
ねもしくありがなるんまより。いで給なんとて。
いづこまでもとすれとまはなるひ給ねば。はし
さなき心ち志給てなん。いま又かやうまもさふら
ちんとてこちのぬ。白（蓋ん）のなどうなきありまいさ
らんとせひのひぬべきれ心なりもいづらりしくて。

さふらひのべさうなる右京のをめしてよべまゐで（蕙詞 白ノ）
させ給ぬと（うけ奴）承たりてまいりけるとおもしし海さ
ぬほどなりかれバくちおしき紙うちまやまいる
べきとのゐへだ（右京詞）ふハまゐでさせたまひなんと
ゆきばさしらバ夕つるともとて出ぬ（ん）ぢ紙（中）これ
れけるひかりさ海をさゝ給ひびどもおどて芳の
大人の御心をきてをもてたゞへて出ひぐまなり
けんとくゆり心のこまきりゆけばらぞや人やま
ちらぬ心ちらんとおもひへし給そのまゝつり（蕙ノ地）
いまぐさうじまて（大宕殿之 精金之）いとゞをこちひをのこし給
けゝおもしろし給ゑ（女三）ぬそなぬいとけく

ぐちこうことごとをきこえて給。鯉佛などこのうへ（中心）
もろやうじのべきなめり。うやうなりついでまこと
つけてやをしてもりぬるぞやとおもむけぬへる
くしきなれば。いと（蓋詞）あるまじきことなり。れなまぐ
も心のどうまをおぼしなせなどをしへ罪て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば。何（蓋心）まりなが
ねもとありがなるんまより。いで給なんとて。
いづこまてもとすれとまはなるひ侍れば。はし（詞）
さなきぬち志侍てなん。いま又うやうまもさつる
ちんとてこちなぬ。安（白）のなぐ（蓋心）なるさありまいさけ
らんとせひのひぬべきれ心なりもいづらりしくて。

さふらひのべさうなる右京のをめして（葉詞）よべまうで
させ給ぬと承（うけ毎）とりてまいりけるをおもしし海さ
ぬほどなりなればくちおしき紙うちまやまいる
べきとのゐへだ（右京詞）ふはまうでさせたまひなんと
ゆきばさしらば（葉詞）夕つるもとて出ぬぬ（ん）ぢ紙（中）これ
れけるひなりさ海をさく給さびどよおどて芳の
大人の御心をさてをもてだへて出ひぐまなり
けんとくゆり心のこまさりゆけばなぞや人やま
ちらぬ心ちらんとおもひへし給そのまゝなり
いまぐさうじまて（大宮殿之）いとぐとこちひをのこし給
（精金之）
けゝおしらしし給ゝ女三ゝ女もなる紙いとつく

おほどさて。抱しどけなきれころまも。女三ん かく女れ 葦
氣色をいとあやうくゆくしとおぼして。女三 問 いく世ゑ
もあらじをこそてまつらん程はかひあらさ海まて
こしのへ世中をさひすて給ふんをもうろ身ゆ
てとさ海ふげきしゆべきまもあらぬをこれ世
まていふかひなきこ心ちすべき心まどひに。いとぐ
つゝやうらんとのゆふがおさ葦ん けなくいとおし
くてよろづをさひけちつゝおまへまてを抱さひ
なきさ海をつくり給。左のおほ夕い後まハ六条院の東
藤葉家住給西之
のおとゞをこがきさしけしひて。かざりなくよろづを
とくのへて。まち白を 笑し給ふ。十六日 いざよひ の月やうくさし

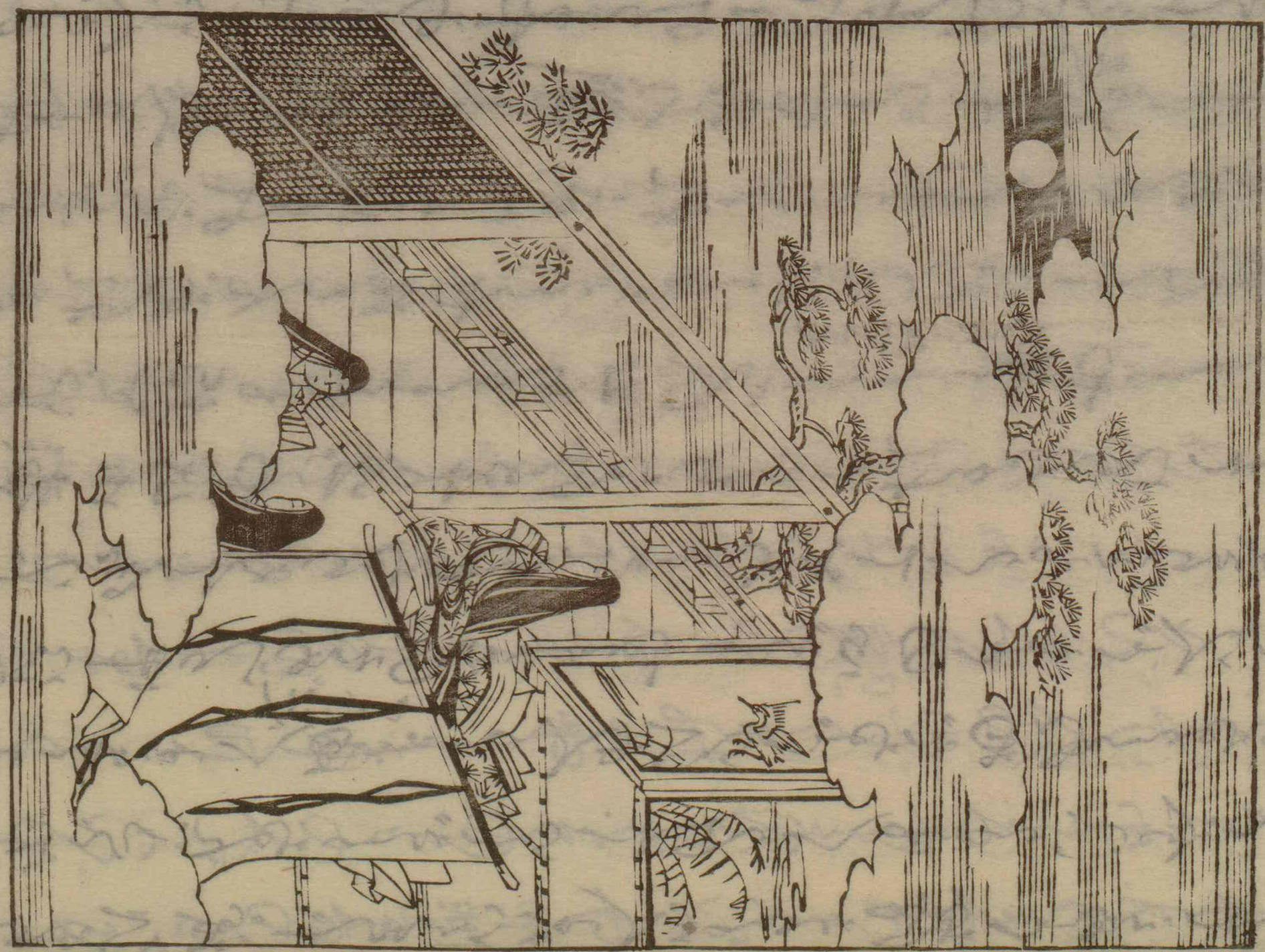
あがりまで心もとなるれば（タム）いとしも（白ノ）心にいとゐ
ことまでいかなるんとやすらぶおぼして、あな
いしのへばこれゆふつるとうちよりいでゐて二条
院になんおりしますなるとひとり、おぼす人もなへ
れども心やましくれどこよひすぎんも人ひへ
ちらべくれば、君子の仏中ねしてきこしめへり
（タ）おぼぞらの月ぶにやどろひが君にまつらひ
すぎてこしぬ君に、（白ム）宮ハ中々今なども（中二）えしじ、
心ぐるしとおぼさしてうちにおりしけるに（白ノ中ヘ）君ふと
きこしめへりけり（中）君やいかゞありけんなをいと
あれにおぼされくれば志のびてひとりめへりけり

まりらうたげなる有さ海をうすてくいづべき
ちちもをぎいとおしかれば、よろづにちぎりけ
ちぐさめかるゝて、もろともに月をながめておりすう
ほどなりかり、女（中ん）君いはじろもよろづにおもふこと
おほかれど、いかで氣色にいざさじと、よろづに
わかで面しつゝ、つれなきさ海し給ことなれば、
とくるさくもとがめぬさ海に、おほとうにもてな
しておもすうさ海いと哀なり、中（夕子息）将の来り給
へる夜、さくぬて、さすがに（匂ん）かれもいとくおしかれば、
出給もんとて、いまいとくく海いりこん、ひとり月か
ミ給そよ、心そらなれば、いとくしと笑をさきのて、

る夜ゑいらいたれば、かくれのゑより志ん殿へ(ぞん)いる
罪給れ(中ム)うしろでをゝをくるまどもくも見えるが、
ぞまくらのうきめべき心ちのまれば、心うき抱く
人の心なりやうと、我ながらしたしろ、おさゑまさ御ど
よりうろぼそく衣なる身どもまて、世中をしひ
とゞめうさ夜まもおもせざりし、一所(八ノ方)をこれまさ
ひしさまて、さう山(宇沈ノ方)里ま年へしかど、さゞいつと
なくつれぐますぐうはありなぐら、いとかく心ゆ
しうて世代うきもれとも心しらざりしまゝうち
つぐさ(八と大と記去ノ方)おさましきれことぐも代しひし程に、世まゝ又
とまりてゑ時ゆべくも見しず、遠しうゑましき

とのゝぐひあらじとおもひしを。令なぐくて
いまくでもなぐらふれば。ひとれせひたりしほどより
し。ひとりずまもなりやうなる有様を。なぐらべき
とくもせしるど。こうかぶりはまくげなき 旬ノ心
だんもてなしなるまゝ。やうくせふとうすらぎ
てありへつる紙。これありかしの身のうさはこと
へんゝなく。かぎりとおぼゆりぎなりなり。ひとゝ
すゝ世まなくなり給まし人ごよりも。さりとも
これは時ごもなどかはともせしべき紙。こよひかく
こすてく出給つらさま。こしうゝ引き記これうき
こぶり心ぼそくいうじまが。ひが心なぐらなりひやら

るなく心うくも有れをのづからたがらへぞ
などなぐさめんことをしつるさしるをばすて山の
月のこすゑのぼりて東ふくるまゝよろづしひ
こゞれ給松風の吹くる紙ともおしまゝりし山
おろしにおもひくらぶれば いとのどかなるに
しうめやすきれすまゐるれど こよひはさも
おぼしぎ志ゐの葉のをとまはをとりて おぼゆ
山(中)里のまつのげにもくどりまゝ
ひあさの風はなりさ



中ん
こしらへハワきれまけるまやあらんがいへども
なぜ・い夜（老人討）もいらせ給ね・聞こうハいことなべるもれ
を・おさましうもれこされらぶもれをぶる
ゆらんじいれ○ばいかるなるしせ給ちん・おれ見
ぐるしや・ゆ（大ノ記ニ給ふまえ）しうせひ出らるしことも約せ・いと
こそワりちれとうちちげきて・いでや此れ事（こと）
よ・さりともかくてをろかまはよりもなりとて給りじ
さいへどもとの心ざしふうせひそめつる中ハ名
称なるらぬ物ぞなどいひあへるも・さ（中ん地）面ぐまさる
ら・今ハいかまもくかけていもざらるん・こゝ不
こそこゝめとおぼさるゝハ・ハいもまじ・被ひとり

恨(うき)ましんとまやあらん。いでや中(基)納言殿のさばかり
衰なるれこころかゝさ夜など。そのかゝの人ぐにいひ
あはせて。人のれすくをれあやしかりけること
よといひあへり。家(白ん)いと心ぐるしうなげしなぐ。
色めしきれ心を。いかでめでこささ夜ま。まちら
ちまわんと心げさうしてえなるずこさしめのみ
れけるひいんかるなし。六条院まちつけのみへるところの
有様も。いとおしかりかり。六忠人のれほどさぐやうな。
あへかるまなどはあらで。よきほどまなりあひこる
心ちしぬへる夜。いかるんねこしくあざやぎて。
心ぎへもこをやかるかるはなく。もれほうりかる

などやあしん。さあしんそうしてあるべかれなど
おぼせど。さやうなるれけしひまはあしぬまや。れ心
ざしとろかなるべうも。おぼされざりそり。秋さ夜
なれどふけましかばまや。程もなくあけぬ。かへり給
てもさいへいふともえけたり給ひず。志げ。おぼされ
ごもりて。おさてぞれ文かき給。れかしきけ志うは
あしぬなありと。おまへなる人ぐつきしろふ。中さい
のれかるしそ心ぐるしけれ。天下（あめのしたさ）りあまるきれ
心なりともとのづらけをさうくしともありなん
りしなどさぐましもあしずミなれつうまつり
さうくごなれば。やすらぎうちいふとぐもなりて。

まべて我ゆるげるるつきまぞありけり。れ(六字)かへりも
(白ノ方ニ云)こゝろまてこそはとおぼせど。よれ目どのおぼつる
なさも。つねのへぞてよりはいかゞと心ぐるしきれば。
いそぎ(中ん)ゆゝり給。ねくこれのれうちいとめでこそ
こゝ前ありていり給へるまふ(中ん)しこゝろもうこそあれば。
すこしおきあがりておとすりまうちあつこゝのへる
自のまゐひなど。けさしもことまおしげさ面
さるまてこしのへば。あ(白ん)いるく泪ぐまれて。しばし
うち風もり雪しの紙ぞ(中ん)づしくおぼしてうちこゝろ
がしのへるかこれかゝるもんざしなど。我いとあり
がゝげるり。家(白)もる風りしこゝろさま。こ面やりなる

ひとゝにぬ宿ゝ庵にて。やうのありは行しかど。との
げしいとよくをこゝろ抱をとの給へば。いとゝ（句詞）く
こそさはやかなれとうちけしひて。なつしうあい
げつきこゝろにも。これまなしぶ人はあらじかし
とせひなぐらゝ（地）ぬ紙又ちくゆりしきうこの心いれ
のこちそひのへるは此心ざしのとろかるゝぬなめり
かし。（中心）されどこのふ程はかたうけぢめもなきまや。
後の世までとちひこれめ給ことぞのつきせぬと
きくにつけてもげにこれ世はいとこゝろくめる。食
まりまをけしきれ心はこしめべれば後のちぐり
やこぐちぬこともあらんとせふまこそ。れこりずまる

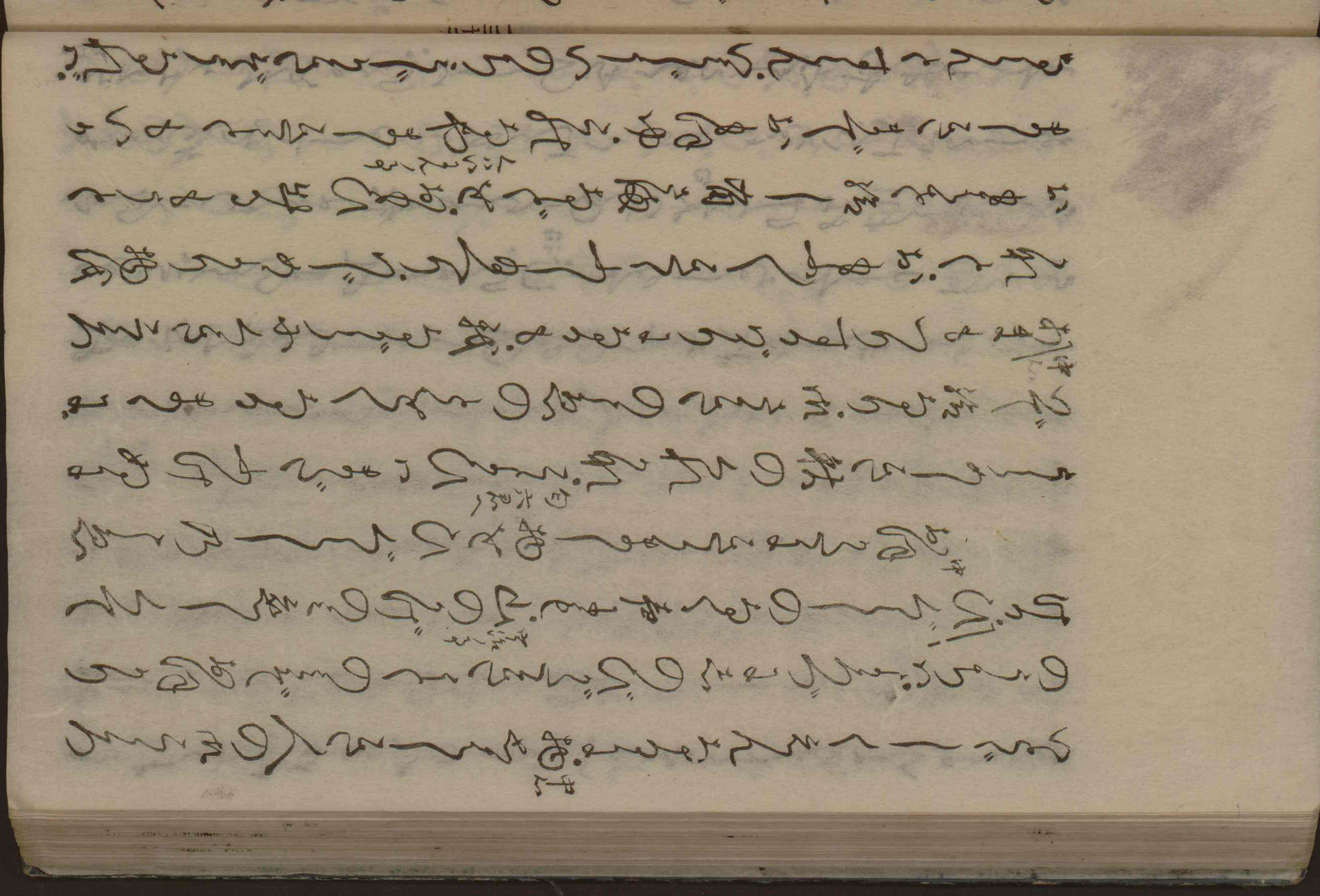
まるもこれまれぬべかれとて。いえじうねんずべか
めれど。え思びあへぬよや。かふはなき給ぬ。日比を
いかでくせひかりとこしなしじと。よろづにおもひ
まぎらはしつる氏。さ海ぐりおもひあり。まる
ことしおほかれば。されこもえまてかくされぬよや。
こぼれそめていとゝまをえこめしひ給ひぬを。いと
もづしくまびしとせひて。いたくそむきぬへぞ。
白ノ
志ぬてひきむけ給つ。詞ゝしぬるまくに哀なる此
なりさ海とゝつる氏。程へぞそゝる此心とそ申し
ぬひかれなさらずは東の国どにおぼしかりにこる
ことて。ワガ此袖志て泗をのごひぬへば。中詞東のまの心

がちりこそ。の給ふ所けてをしたらしれ物ぬれ
とて。すこし得く思ふ。ぬげ（自詞）よあが君やおさなれ物
いひや。されどまことまは心よく夜のなれだいと
ろろやすし。いうじうことくちりしてきゝ也とも。
いとしるうるべきけざぞ。むげよ世のことくちりを
しり給ちぬこそ。らうしきゝ拖りしつりなれ。らし
けがれ身よなしてもしめぐしぬへ。身を心とも
きぬ有様なりうし。もしおもふやうなる世もあらば。
人ままさりける心ざしの得どもしらせなるべき。
一ふしなんあるこゝろやすくこといげべきことも
あらねば。命のこそなどの給程なりしこゝなり

ぬへるれ使(つひ)いといふうゑひすぎまされがすうしいで
うるべきことも忘(しれ)て、けぎやうまこれこれとかもてま
まれり。おまれかうめづらしげるる玉もまかげき
うげまれうる所ざるめりと人ぐこうい(地)川の所どま
いそぎうきる給つくんとこうも。やすうずもあり
けんかし。家(白ん)もあるがちまいしむべきまはあるもど。
さしぐこはる所いとおしき所。使(ノ)すうしのよういも
あれかしとる所ゐるいくいくかれど。いまもかひ
なかれが。如原志てれ文とりいれさせぬふおるじ
くはへぐそてるきさ所まもてるしもそくむと思し
てひきあけぬへるま。まく(蔵義)毎の家のれてちありと

ゑれば。いますくしころやすくてけとさぬへり。
文ノ詞
をむじがさまてもうしろめるのけぎや。さうしらは
うさもらいるさま。そくのし侍れど。いとなやまし
げまてなん
藤家
をこれへしきほれぞまさるあさ家のいかま
ときけり名称ちるらん。あてやかまかりしうかさ
白ム
ぬへり。かごとがましげなるもけづらりや。まことは心
やすくてしぐしはあらんとなもふ世とおもひのほか
にもあるかれくどいの給へど。地まるゝしとなくて
さあるべき抱まなもひなしひとゝ人の中にそ
かやうなることのうちめしされども。うるひとゝ

しくはあれ。せんぞ。これもいとかくし。うゐまかう
べきれことなり。女こちとさゝゐる中りも。
すぢことは世人をきてしれば。いくこりもくえ
給らんことも。もどきあるまじそれば。人もはれ(中)るを
いとおしなどおもひこゝぬなるべし。(中を)うぞかり
もおくしきくかしづきすへまて。心ぐるしきかる
とろかるまぢおぼしこるをぞ。さいもいおりしけり
とい字ゆる。(中心)こづるの心にも。おまりまちるりし
まて。よはかまちしさなるべきが。なげかしき
なめり。うるすぢをいかなれば。おさかぢ人のせふ
らんと。芳物語などをこゝにも。ひとれうへなど



やうなんついでにもや。そうなく女なんと
すんなどぞふにはおしりし○どうなしうもあり。
又いとつこふうもあるる物をなど。海どろまれ
ぬまくにおもひあるし給。その日は（奴石中文）さいの家なや
ましげにおもしますとて。これもくまいりけ
どひこまへれどいたくなるれぞりおりし
ましそれバことなることもおもしまさずとて。
（夕）おとゞいひるまうで給にけり。（蓋）中納言の恵さそひ
きこしめてひとけれ車にてぞ（夕へ）まうで給にけり。
こゝひのごしきいうなんきゝをつくさんと
おぼすべかめれど（地）うざりあんかし。これ（蓋）きこも心

ちづし。それど。たゞしきりの先にはけがれる
ざ風にまゝさるべき人もおもきず。地のうへにきんに。
こゝろことにまゝもれし。給人なれば。なかりし。例
なるぞいそがしうまうで。給て。人の(葉ノ六ノ)れうへにこゝなし
ゝる。紙口おしとも。おもへらず。なまやうやともあ
ぞろにあつひぬへる。紙おとゞ(タム)はひとしれずなる。
れてしとぞおぼしけるよひすぐる程に
おかし(旬ノ)ましうる。たん。夜のこれこのひさしぬんがし
によりておましまいれり。れ(ざい)。夜や門れいのれさ
らにまぐうるしげにまゝよりまて。又ちいさきこゝ
ゝにはくゝ。そくのさしどもいと。夜ゆうしう

をさせなて。もちゐまいらせなつり。めづらしゝぬ
ことうさをとくとそまくなれ。おもぐつたりなて。夜
いたう更ぬるをとゝ。女ぶしてそぐのしこさうて
なへど。いとあざれて。とこにも出給ふぞ。水方の此
ちらうらの。右清つ皆。藤寧相ちとゞりもれし給
旬うらうして出なへるは。いとさうかひあり心
ちす。あるじの左中将。はさうづきさげて。はぐい
まいる。つぎくのはうらけ。二たび三たびまいり給
源中納言のいたうすゝめなへるに。宴すこしほゝ
なへり。けづらりしさつたりをとゝ。ふさりしかぎちひ
ていひしを。見し出ちちあり。されどこしらぬやう

まていとまめなり。ひんぐしの屋(さい)は出ぬて。此ともの
人ごもてもやし給。見てあり夏。上人どもいとおほ
り。四位六人は。女のさうぞくはほそながそへて。
五位十人は。三人がされのうちはぬ。おれうしもこれけ
ぢめあるべし。六位四人は。おやのほそながそう夏な
ど。何はかぎりあることは。あらずおぼしかれど。地
の色しざ夏などをぞ。さうらは何にしかへりけり
めしつぎとりなどの中は。こぐりがもしきまで。
いかしうなんをけり。(此)けよくはざりしさう茶やかな
なことはこうかひあれば。地(此)などはもまづいひそこう
まやあらんされどくりしうはそぞへそぞりけりとや

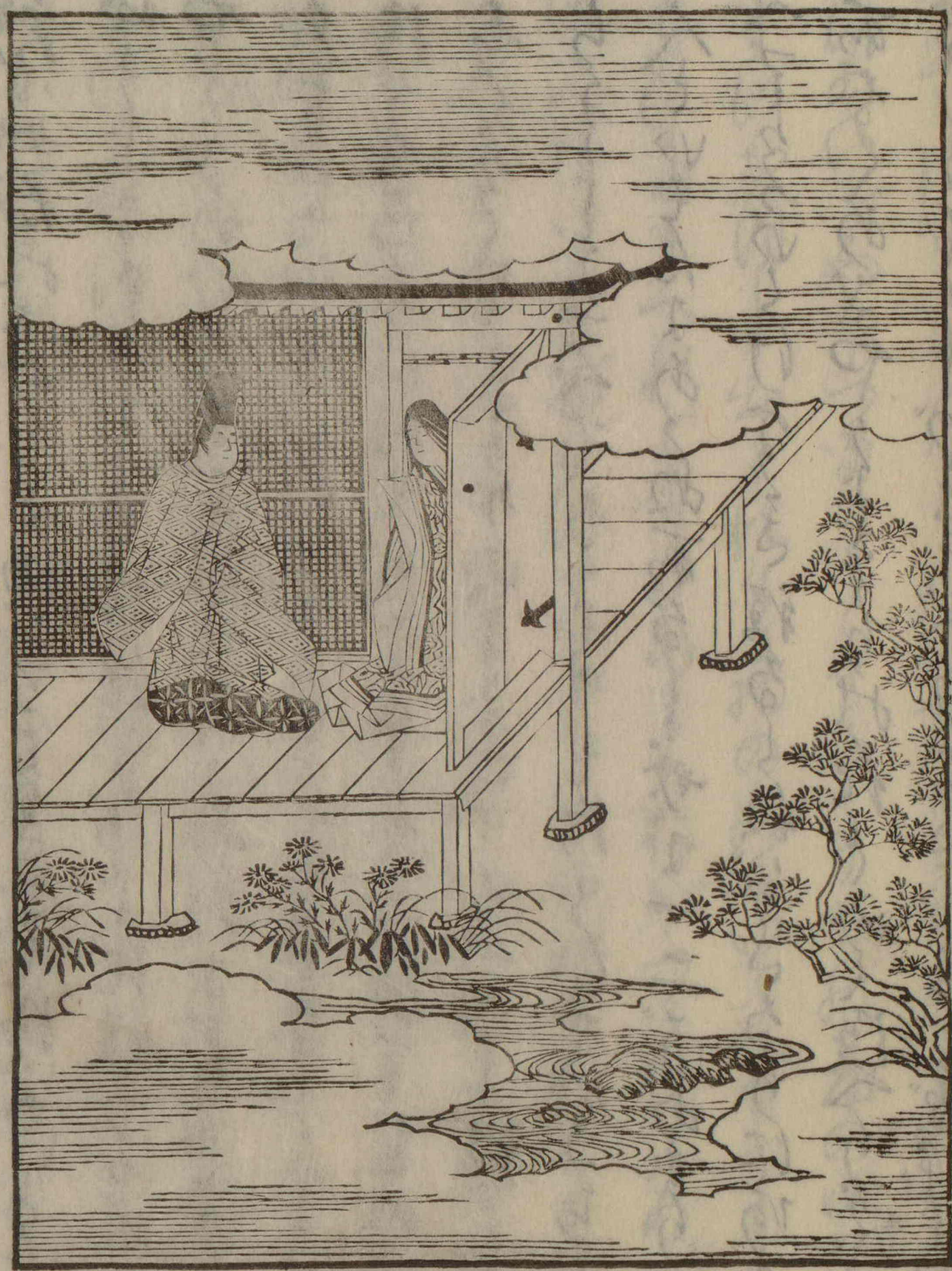
中(葉)納言殿の内前れ中まおまおぼしあぎやかなら
ぬやくらきまらざれまたちまじまたりくんがへり
て打るげさてづが殿(葉ノ内ノ人ノ句)のなどかおいらかまこれ殿(タ)の内
むこまうちなりを給まじきあぢきなる紀内ひとり
ぜこやと中門のもとまてつぶやきけるを(葉ノ)きつを
給ておうしとるんおぼしかる夜の姫けそねふる紀
よがれもてうしづれかる人がいたちよげまゑひそぎ
待てよりかしぬらんうしとうしやましきなめ
まうし(葉ん)恵ハいりてふし給てがしきなげなるわざ
なるごとくしげなるさ海しうるわやろいぞぬて
もるれぬなりたひるれどこれかまた火あるうかし

げて。おくめきこゆるさうづきなどといとめやす
くもてなし給めりつるなど。みや(句)のれありさ海
とりやすく出出たてまつり給ふげに我にてもよし
とおもふ女子ともらましかばこの家(句)をきこそ
まつりて。うち(内裏)にぞまえまいらをばらましと思ふ。
これもく家(句)にはなしむと心ざしのへるむもてめハ
る线源(芸)沖納云にそとりぐにいひなしふなる
ようけが覚えれくちおしくハあらぬなめれざるハ
いとおまりよづかずふるめいろ物をなどんをごこ里
きせらぬ。うち(女二ノ事)のれ久し紀あることまことにおぼし
こんにかくのこもれうくおぼしばいりぐすべから

むおもぐてしきことはありとをいくばあら
んいうまぞ大敵言はいとよくはこまへらん時はう
きしからむうしとしたらあらはさすがはえもて
ちるるまじきふるめりうし例のねぎあがちな
はつれぐるれば女三ノ人ゝん女三あぞちれ言とてひとよりはすこし
おもひまし給へるがつがひはたりしてその後は
ありしのつ何をきこしんと人のとがむべきはを
何ぬはくるしげはいうぎおきなをたゞるらず
おもふべかめるを
あぞち
うちわたし世はゆるしなきせさ河をこるれ
そめかん名をそかしかれといとおりしければ

芸 ゆくらぎうへハうゆれどをさげ乃志るれ
うらひもゝゆり拘りはぶ地しとの給いんまてぶに
このもしげるきをこれうへのあさくハいとゞこゝろ
やましうおぼゆらむりしつまどをしてゆくて
芸詞 海とハ此そらをこゝまへいりでゝこれを志らずが
まてハあるさんとよえんなるひとまゐまはあら
でいとゞ可しがくてゝなりゆくよるくれねざ
ゑんまはごの世後の世までなんしやられて衣なる
るどいひまぎらりしてぞいで給ぶ地とまたりしき
るれかずをつくさねどさ海のなまめりし紀みな
しまやあらむなきけなくなどもこゝへまなを

と連語ぶりそめれ　ともいひろ先
語へる人のけぢくてぶるまこてまつらがやとの
こむきこゆるまやあるがちに世どうむき語へる
十三
家のはるこにえんとこづひつ海いりあつまりて
さふら姫もおそれなることかどくまつけ法くれ
かるべし



白山 六君
実ハ女君ハ此ありさ海ひろこきこて給ふいとゞ此
心さしまさりまさりにかり松田きけよ紀程なる人君
やうぶいいとこきよげまてかみのさがりだかし
らつなるどぞものよりことるあるめでことこそ
給ふ色あひ所まりたるまで匂ひてをのく
志くくこゝきかのまこいとちづかしげよらう
らうじうすべてなまぶすもたしひてかたちよ紀
人といそんにあらぬ所なし女に一二ぶあまり給
へまゐるいとけなき程なるねばかたなりに所ぬ
所なくおぎやかにさりの花とみて給へりかぎり
なくもてかしづき給へるにかなるぶげにおや

まては心もまどりし給つべかりけり。たゞやりうゝ
にあいざやうつまらうしこさるすハ。かれ臺のれ(中)ゝハ
まげおぼし出られけり。袖の給ふいゝへなどもたゞ
らひ角まへれど。まゝあまりたがつゝ明くハあらぬ。
あべていと三所おほくかどくしげなり。よさま
か人ども三十人ばかり。わらは六人かゝかなかなく。
さうぞくなども。例のうかりしきことハめなれて
おぼさるべかめれバ。ひさ角がへこゝろえぬまでこれ(好)
こそ(殺)志給へる。三条(でう)殿(雲ゐのいらこ)がらのおほい君と。長家す
まいらせ給へ所よりも。これはるすとバいとことに
おもひとなてきこえ給へるも。(白)家の御気てあさ海

きこゆるありさまにてのち二条院（中）にこゝろやすくも
わたり給ひぞおろ〳〵たまはれ見なすれば、おぼせ
まくはひかれ経なども、え出なかりしが、やがておなじ
これこのまちまらし沈みしやうまたりまして、
くるればまたえひきよせても見たり給ふ涙などして、
給ひどとまたるおりくあるくとかく（けん）らんずることは
おもひしかどさしはかりてはいとうしもや
いちどりなるべきげまんあらむ人はうずあらぬ身
ともしでまじらふべき世よりもあらざりたまとが
へぞくも山給やきいでくんかどうつともおぼし
ぞらやしくうるしけ道がたく給ひいぞ思ひてつくり

あんびげにそむくさ海にはおもむくとも志づしんを
もたぐさめがや。まくげにもてなしなどもそば
こゝうしそでをぼうめなど。ふひと川にせひあまり
てをげりしけ道ど。中納言殿に流されける。一日の流
事（こと）はあざり乃つゞくあらしまぐりしうこさて給に
さかう法こゝろの名残なるゝましかバりていとお
しくとおもひ給へらるゝにおもしろかたさくばの
こなん。さりぬべくハこゝばぞうらもとさここし給へり。み
ちめくまがこぞまびきもてころちば。まめがちてう
き給へるしもいとをかしげなり。敦文れ忌日
ま。例（れい）のことゞもいてたうとくせさ務給へりけると。

中ノ
よ給こびそこて給へ御さまのおどろくしうハ
あらねどげに志り給なめつもうし。例（慧心）ハこれより
こてまつる御返をぶこようちとけずつましげり
おがしてぞうぐ志くをつぐけ給ぬをこげから
とさへの給へるがめづらしくうれしさ。こゝろ
らさめさも志ぬべし。文（白）のい御めうしくこれこ
こち給へ御かどまて。おぼしをこゝろまゝもげに
こゝろぐるしくをしまゝらの御返バいと衰まて。おかし
やかあるすもなきさ御文をうちもなるぞ引久しく
見ぬ給へり。御返（返す詞）ハうけ給ハりぬ。一日ハひじつにぐち
こゝろさ御まてことさらに志のび侍しも。さ（ハノ忌日ノ事）なおひ

給ふるやう侍るころかひまてなん。ちゞりとの給
ハせらるこそ。すこしあさくなりまゝるやうにと。
うらめしう志給へらるれ。よろ所ハいまさゝらひて
なん。何なりしこと。すくよりは。志ろさ志さしの乃
こはくしきまてあり。さて又の日此夕つくこぞわ
たりぬへる。人心志まぞ志ふ心しうひたれば。あいな
くんづひいこうせられて。なよくかたする法ぞども
といとゞ。ほりしうへぬへるハ。あまりたど語く志
きまで何なる。丁子ぞめ此あふぎの。もてなら
しぬへるうつりがなどさへ。ふと面んかこなくて。
おハしたるを。女ぞ志もあやしかりしよ此とな

どおもひいで給ふおりくなきましもあらぬぞ
まめやうに衣なり給ふころだへ此人にすず掴しぬ
とみるまつかて出てもあらましをとぞうりハたもひ
もやしき給かんなまぶすもいたけなさかどよし
おもせねバうらめしき人の流んだへと思ふらぶる
まハなまごともいとゞこゝまるく思ふられこまかや
つねまへぶてお得うきいとおしく掴思ひ思ふぬさ
海に思ひぬふらんなどおもひ給てかふハこすのう
ちにいまを生なり給て もやのこすに来丁うへて我を
あこしひさいりて ふいめしぬへりわざとめしとは
待らざりしうど 生いなしらぬゆるさせ給へりし

よろこびまをしたまはしく侍しを云
わたらを語とうけ語りしかばおりあしくやんとて
かふまゐし侍まかるさはさし比の事語の志しも
やうくあらはれ侍るまやべきてすこしうほらば
侍まかるこすのうちよめづらしく侍るざうなとの語
まゐ(中心)ばいとをづかしくいひいでん云の葉もなさん
ちまれど一(詞)日うれしくさく侍し心のうちを例のた
ぶうじまがら進ながら通し侍なばしひしるかたりしを
だよいりでかはと口おしさまといと問ましがな
乃この語ふがいらくしぞきて角しぐかのかり
きてゆれば心(慧心)もとなくて(詞)いと遠(とを)くも侍るかまあ

やうまきこえさせうけ給たらまほしき世の物語も
侍るもれをとの給へば、げ(中心)まとおぼして、すこしうじ
ろきより給ふけかひをこさて給ふもふ(蕉心)とむねうちつ
ぶるれど、さりげなくいとゞ志ばめたるさ海して、宮(白)
れ侍て誘ぢへ、むかばまあさう たかしかりとおぼ
しく、か川ハいひもうとめ、まゝなくさめ也、うゝ
がこに志ぼくときこし給つ おかせ、女(中心)君ハ人(白)の
侍うらめしさなどハうちいでかゝらひきこえぬ
べきなすまもあらねば、たゞ世やハうなまとやうま
おもしをて、ことばくちまままぎこゝかしつゝ、山里り
あらさ海まわうしたまへとたがしていとねんで

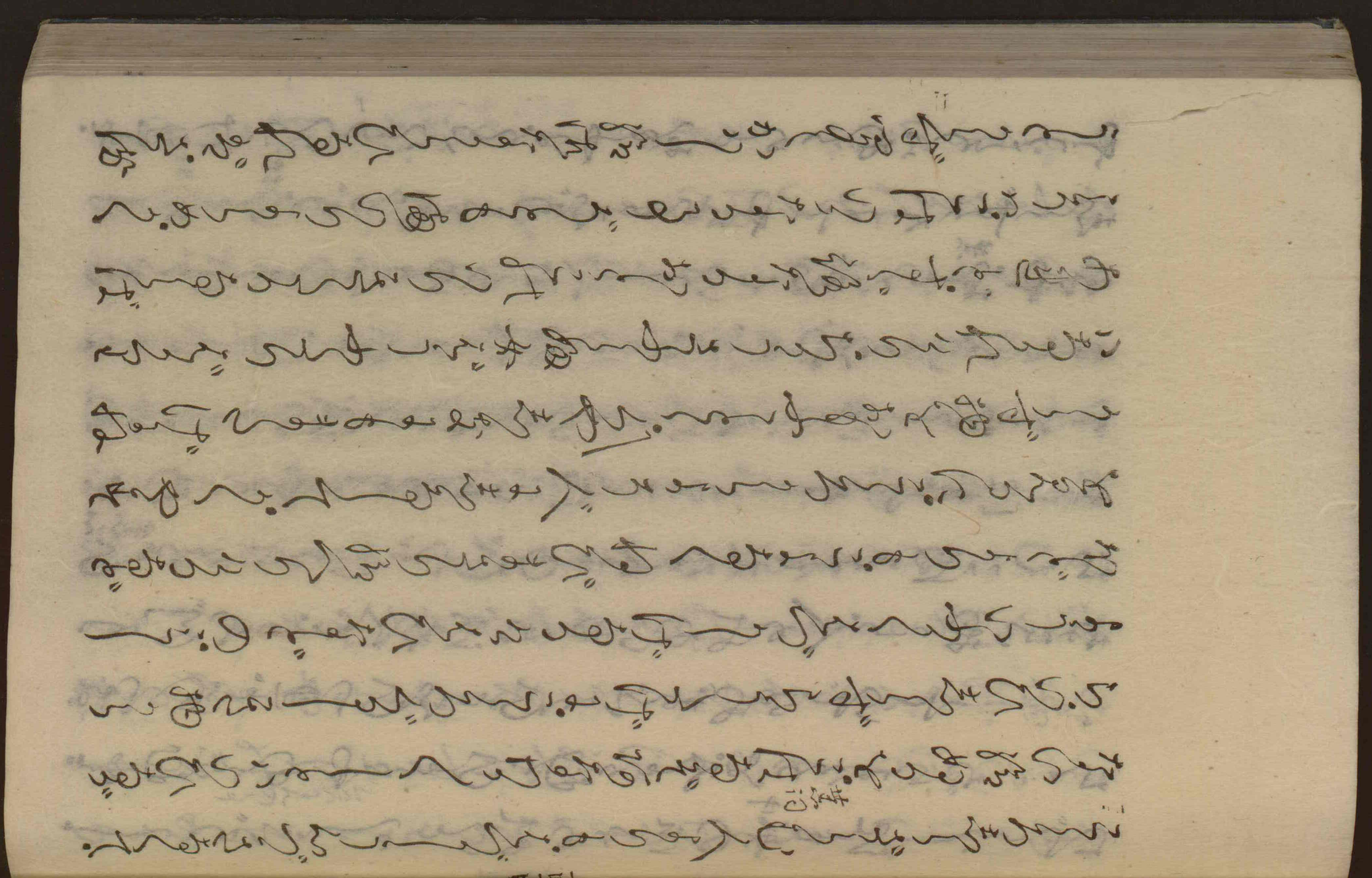
ろまゐての給ふ葉詞それはしをごころひとつにまゐらせ
てはえ法かうまつるまじきるまに給ふなり程匂
さて心うつくしう寄とさせ給てそれ法かしに給ふ
ふるがひくなんよく給べきけらずはまこしもたが
ひめまてふがろくもるどおぼしものとんすいと
おしう給りなんさこまにのるまじうはみちの程の法
とくりむかへもおりこちてつうまつらんにおまれ
たぐかりは給らんうしろやまく人まゐぬこころの
かどは匂家もえるまゐらせぬへりなすどもいひあるがおり
おりはるましうこれくやしきを忘るおりなく掬
まもがれやとさりかへさ海かしきけまるどかの先

かしつてやうくくらうちりけるでおはせるよ。
いと(中ん)うるさくおぼしてさ(詞)しがこちをちやましく
のゝ給ふ文よろしくしなへんかどまちまごとを
さていり給ぬるをしきたるがいと(葉ん)くちおしければ
さて(同)もいつぞりにおぼしつべきよりいと志げう
給しうちの草もすうし行ちしは世給んかしと。
こゝろもりにきこてなへば志(中)がし入さしてこ(詞)れ月を
見ぬべかめれバついこちれほどにもとこそハ志給れ。
こゞいと志のびてしそよろめ。たまゝる世のゆるし
ちどことくしうつとの給こ志のいろ(葉ん)じうらう
ゆげちるゝなと。つゆよりもむかし志いでらるゝよ。

ゐけちらうなすとつひよりもしかしむいでらるゝよ。

えつみあへでよりぬ給へるはしられもとの。
すぐれのむこよりやとらをよびて此袖をひゝへの。
女（中ハ）さりやあるゝ心うとおもふよたまごとかいはまん。
抱もいられでいとゞひきいり給へバそれにつきて
いとなれがほよなからハうちにいりてそひふし
給へり。あら（蓋詞）ぞや。思びていよろべうおぼしこともあ
けるがうれしきハひがみくゝと望しさせんとぞ。
うとくしくおぼすべきにもあらぬを心うれ御
気色やとうしゝゐへバ。いゝ（中ハ）へしべきこうちもとず。
むりずまふくむひなりぬるをせめてむむづめて。
おもひのかなりけるは心のわどうな人のむふしん

ことよ。おさましとあぞめて。なのきぬべきくしれなる。
すこし（芸詞）はことりなれば。いとおしけれど。これはとが
あるぞうのことゝハかぞうれこいめんな。いまし
へともおぼしいでよかし。すぎまし人（大）の所ゆゑ
しをありし地と。いとこよなうおぼされまなる
しそ。中ゝうしてあれ。すさぐ。しくめざ海しき
心はあしじと。心やまくおぼをとて。いとのどやかに
もてなしなへれど。月ごろくやしとしひてる
心れうちのくるしきまでなりけさ海とつぶくと
いひつゞけ給て。ゆるすへきくしきまもあらぬよ。
せん（中心）ゝなくいらじともよのつゐなり。中ゝはげま



[illegible]

わづらはし記も。女の作るめ此いとかしこぶりし。

なやましげよさてわかるゝ作んちもことりぬかり
いとたぼうしとおもひ給へりつる。うし（しゆいまんのうす）此志るし
まゝ於ほくハこゝろぐるしう覚えてもやこゝめるれ。
後いろおこがましけれこゝろやと志へど。なきけなる
らむことハ。なほ後いとかいなるべし。まゝたちま地
のわがしく給らぶれまゝをて。何ながちなるこゝろ
とつひて。のち心やしくしをえあらざらんもの
からわりなく志のびはりかんかどもこゝろづくしよ
女のうるぐおぼしこゝぶれんことよなど。さうし皇
志ふよをうれぞ。い海のまゝも寒しきぞ見るなるり
なる。さらにえでハえあるまじくおがし給を。返（地）て

あやまくなるころなりや。むかしよりハすこしかそ
屋ぎて。あてまらうこうつけたひなどハ。こち
もなれこちともおぼこぞ。身まそひこうんちして。
さらまことくもおぼえぼなりまこり。うぢまいと
けこうまほしげまおがひなめるを。さもやまこし
きこてましなどしへど。まさまこのハゆるしなひ
てんや。さらとて志のびてもこいとびんなるこむ。
いうさ夜ましてかハ人めみぐるしからで。しふこうなの
ゆくべきなど。こころもあくがれて。ながめふし給へり。
まぐいとふうさあしこまほふこあり。例のうたべき。
いとけぎやうなるこそ。よて

いづらまつけつるみちの露しげこむし
たがゆる秋の空かれ。れかし。紀のこころうさハ。とえ
里しらぬつらきのこなん。きこしさせんかこるくと
あわ。れ(中ん)かへしなからんも。人の例なら。後見とがむ
べきをいとくるしけれ。ば。うけ(文句)たまわりぬ。いとるや
ましうて。えきこえさせずとぞらうきなへると。
あまり(慧ん)ことぞくなくなかれと。さうぐしくて。
おかしかりつるれけりひのこ意しうしひ出らる。
しこし世中をもしりなへなをまや。さぞらあ
さましうわりなしとハ。しきへりつるもれから。ひこ
ゆるまいぶそくなどハあしぞ。いとらうくしく

たづしげなる氣色もそひて、さすがになつかしう
いひこしらへなどして、いざし給へるかどの御心
ばへなどとおもひ出るもねくさうをかなしうを
さ海ぐに心にうくまてまびしくおがゆ、なまぐす
をいましへにハいとおほくまさりて思いでらあ
何かハこれ白かれたて給ひなが、わ君をたのもしべに
志給べきにこそハあめれさてもあらはれて、こゝろ
やすきさ海にはえ何らじと志のびつくまゝ思ひ
ましく人なき心のとまりまてこゝろハあらめなど、たゞ
このすれこつとおぼゆるぞ、かしからぬこゝろなる
やさばかり心ゆかげにさしがりしまへどかしこと
いふ柚のこゝろうかりなるつとよ、なまき人の御かれ

やさばから心あらげまさしがりしまへどかしこと
いふ物のごろうりかりとよ。ちまき人(六)のけれ
しさは。いふかひちまきかたまでもいとかうくるし
きまでハなりかりこれハよろ所まぞしひめぐ
らされ給かる。かふ(慧心)ハ家(白)わたらせ給ぬるど人のい
ふをきくまもうしろこのころハうせてむ。う
ちつぶきていとうしやましうおぼゆ。家(白)ハ見どろ
まなりまかるハまぶ法んさへうらめしうおぼされて。
あかりまわたら(中へ)給へ法ありかり。何(中ん)ハこころへぐて
たうさ海まもみしてまつしじ。山里まとしひた
川まをこのもしべまおもふ人(慧)もうとましき心をひ
給へまかりとこゝぬまは世中いと所をうおもひなら

是てお後いとうき方なりやりと於じ事ゝせぬ
程ハあるまゝせておいらかなんと思ひてくいとら
うたげまゝろうつくし起き海まもてなしてゐる
まへ是がいとゞ（白ん）衣まうれしくおぼされて目ごろの
をこゝろなぞかぎりなくの給ふ（中ノ）流いらをまこし
ふくらゝまるまゝろにかれそぢ給ふしれおびのひ
きゆゑれたる程などいとあれまゝぎゝ海人を
ちかくてもこゝぬはぎりそれがめづらしくさへおぼし
たりうちとけぬ（六君）所まなるひぬてよろげのなす
心やまくなるかしうおぼさるゝまゝになるかなら
ぬことゞもをうきをぎの給ひちぎるを（中ん）ぎてまゝ川

けてをかくのをかとよきわざまやあらむとあれ
がちなりつる人（慧ノ事）のはかしれもしむしれてどしごろ
あはれなりはんぞんとはしわらつれどうしはなる
ざ海まてハ衣をもあるまじきるとしふまぶ・
（旬ノ事）これはゆくされのこれめれいでやとしひるがしも・
そこしみくとまりなる・（慧ノ事）さてもあさましうしもめ
しゆめていりまたりし程よむしれ人（大）ようとく
てをましるまなどがたり給し心ぞんハげよありが
しうりけまど粗うちとくべくあらざりなりうしな
どいよく心づかひをしはまもひさしくとぞし給
えんことハいと物おそろしうらべくおぼしたまへぞ

ことはいでゝはいはねど。通ぬるうちにはこし
まつりしざ海にもてなし給へ海を。家（白心）をいとぐか
ぎりなう河かれとおぼしつるに。かれひ（菩心）との法うつ
里がれいとかうしたまへるが。よれつ日乃うう
のうにいれしてきしめ魚るにもまず。しろ紀白ひ
なるをそのうちの人にしおもしれがあやしとぞ
めいで給ていうなりしことぞとかしきとり給に。
ことの（中心）わりにもてもなれぬことにしあれがいたん
もこなくわりなくていとくるしとおぼいしるを。
され（白心）ばよかるらずさるるにはあらるんよを魚ぐに
はしりしとおもひまるることぞうゝと法こゝろ

さはぎかり。地ぎりはひとへのはぎ。なぎ。ぬぎ。へ
給てげ進ど。あやしうころよりかまぞ。男よ
うよけり。白詞うぞかりまて。いのうりありてしも。ゆらじと
よろげまきまくの給ひつゞくるに。中心ふうくて。男
ぞをきどう。詠なき。白詞おもひきてゆりさ。後ことなり。抽
と。かゝ進こうさきまたまどうやうまうちそむくきたく。
ことまこそあれ。又はてろをな給ばりけれどやい
面ぬる。おもひのかまうかりかりはんかれと。すぎて
まねふべくもあらず。いとくおし。げに哭給へど。中と
をくもいしへ給ぬさへ。白ん いとねてくて
白 又人になれかりそでのうつりがを我身に志めて

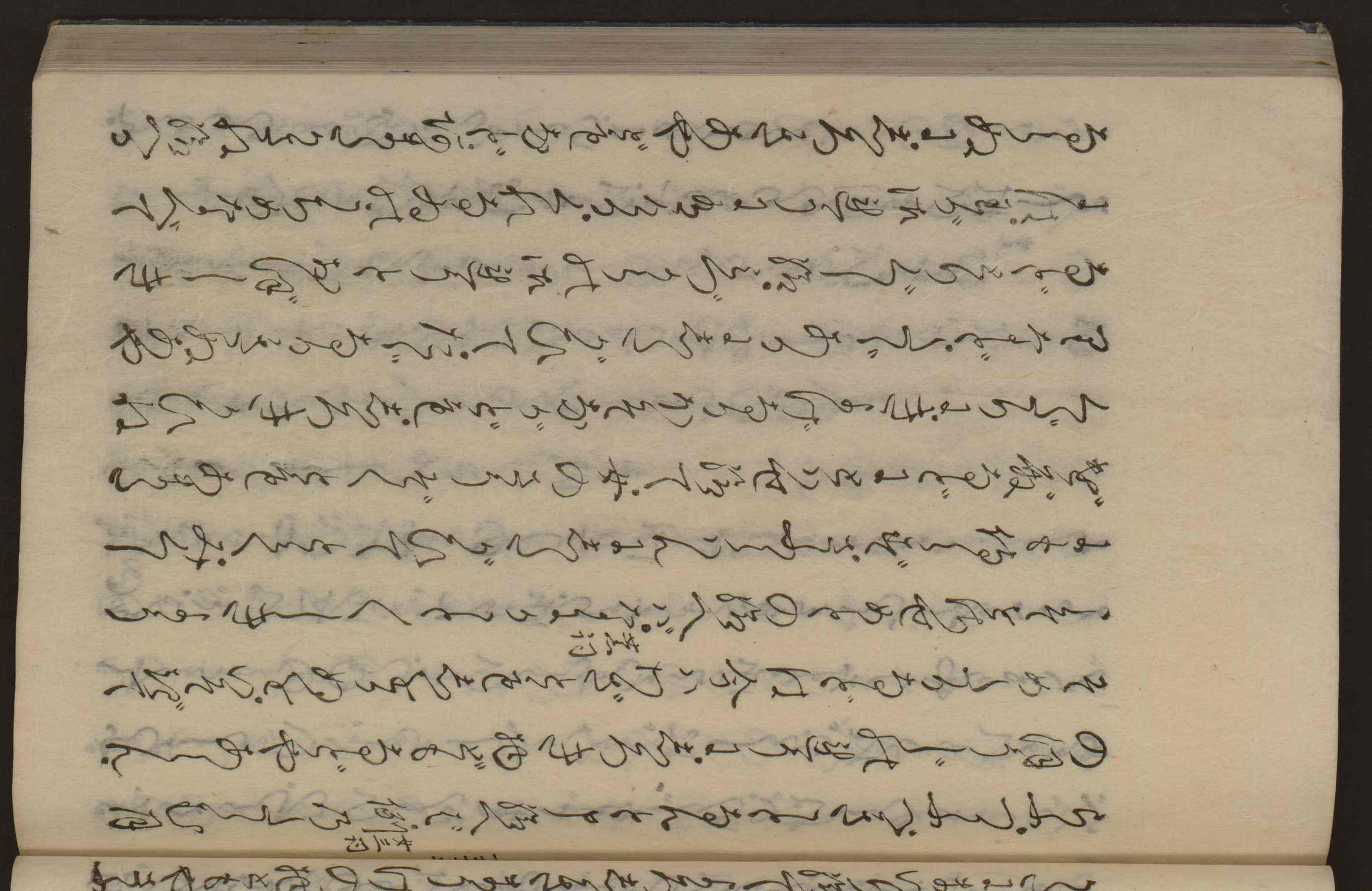
うちはぢられ．女はあさましうのおもひでなるらん．
まこと〳〵しくまめなるをいかゞはとて
かゝるれぬる中の衣とこそしはかるは
てやうけたまはらんとてうちあるき給つゝこの．
うきみとなりし衣ある絹ころもも．あはれはずらしと．い
とゞこゝろやましくてそれをかくとゞめ給
ぞ色めしきはこゝろなるや．まことおほみしあ
やまちおりとも．ひとかるはえぞうしとそちなん
くらうさげなるこゝろぐるしきけさの志給へれはえ
とうちみをてぬ人ずの給ひきしつ．か御はこそへ
きこえ給ふまゝの日をこへ給ふのどかなる御ことのごとき
臣うかゞみてれてうづれかゆるどおこゝるこはあり．す

里おなてはてうづはかゆるどもこるこまいらす
はしつらひるどもさばりかくやくだりこ海もろ
こしはしきあやをこちかさ○ろめうつしに
はかのつねにうちなれこころちして人ぞ此をが
こもなんだみころうちまじ里などしていとしぶ
うにんまはさろ志もなくかなうはいろどもす
なでしこれかうなすがわさねてうちこぶれ給へう
はさ海のなまごともいとうかりしくことくしさ
までさらなる人のはよそひなまくれにしひくら
ぶれどけをそりてもおぼしずなつかしうれし
きもこころざしのをろかならぬにもぢな紀なめ

まうし。まろまうつくしくこえ給へまし人乃。すて
かうやぎこ海に。いろハいよくしろうなりておく
まおくしげなり。うら海はうけ里がなどれ。いちじろ
うらぬおりぶに。おいぎやうつならうたきところ
などのな我人にはおほくまさりておぼさるまく
にはこれともらうらなどにはあらぬ人の。げぢく
いひうよひて。ことにふれつて。をのづからこしけしひ
ともきこえ。これ是んハいつでかたぶにもおもひんかなら
ぞしかおもひよりぬべきことなりをとゝわがいとくま
なきは心なるらひに。おぼししら海里がつねすん
どうけて。しうきはまたなりふとなどやあるとち

うきこづし。こがらひつるどやうれものとも。さりげ
なくてえらまへど。ぢうものをなし。こゞいとすくよ
うことずくなまそ。なほくしきなどぞ。わざと
しるけ是ど。猶ほさりまぜなどしてもあるを。何
やし。なほいとうくのこハあらじかしと。うたがハ御
よ。いとゞ（比中ん）なふハやそうらばおぼさることとりなす
かし。かれひ（旬ん）（恙ノ事）とのかしきを。こころあらん女のおかれ
とおもひぬべきを。などてかハことのかかまはさし
なるたん。いとよきおかひなれば。かゝることまぞしひ
かハすらんかしと。しひやゆゞまびしくいらなく
しくねたりかゝ。なほいとやそうらざまなれば。

それ日もえいで給ひたれば、六条院（六去）にはれ文をぞ二さ
び三たび生れ給ひ、いつのかどにはもりけっと思
葉ちらんとつぶやくおいべどもしあり、中（芸ん）納言の君
ハ、家（白）のうくこもりおかすりをきくましきんやまし
くおぼゆれど、わりなしや、けがこころのおこがさ
しうあしきぞうしろやもくとしそめてし
あらりのことをうくてしやとしぬてぞ思
へしてさはいへどえおぼしもてざめりしと
うれしくもあり、人（中）ぞのけかひなどのなつかしき
かどにはなへだてたありし此しやり給て、母（女三）家のれ
うこにまいり給てよろしきまうけの物どもやさふ



らふつふべきことなんと申給へば。例（女三詞）乃こゝむ月
の明うじ此進うは。志ろき地どもなどやあしん。
そめしうなどは今ハわざとを志をうぬを。いそぎて
こそとおせめとの給へば。なまかうことくしきよう（荒詞）
よも侍らぞざふらいんは志るがひてとくみくし
ぜ殿などはとりせ給て。女のさうぞくとをあまる
くぶりは。きよげなりかそかがどを。志ろきかひね
里などこゝにあるは志るがひて。たゞなりきぬあや
などとりぐし給。こづからぬは進うとおぼしき
よは。まがは進うはあるゝ。くれなるぬのうちめなべて
ならぬは。志ろきあやどをかしど。詞まるかさね給へる

まぞ海のぐちゆりはいまはしこ海まりありけん。
こしれひと川ありけるをひ・さむしてびくりへて
芸 むしてびけるちぎりことなるしこひをを無ぐ
ひとすぢまうしみやはすゑたいふの君とて・おとな
れとおもき人の・むつましぎなる人まつりはて・さる
あへぬさ海のみぐるしき代・つきぐしうもてう
くしてなんとの給て・れ是うのは志れびやうなれど・
そこまてつくこをことなりれらんぎけせねどされ
ぐもりやうなるれこそ志しひをつ〇のことまて
めなれこれば・かし紀ばみへしなどひこしろふ
べなまもあしねば・いりぐなどをおもひつづらそで・

人ごにはちらしなどしたれば、そのくさしぬひか
どもづかさ人ごのおまへちかつかうまつるなどをう。
とりしきてはつくろひたりべなしも法かへどをのい
たうなへだみたりつかすがこどもなど、しろきあらせ
などにてけちえんならぬぞ中こめやすりかろだ
しかはなまぐすをもうし語こうしづさ罗ゆ人乃
あらん。宮ハとろかならぬれんざしのかどにてよろづ
といかでとおぼしとさてこれどこまかなるうちく
のるまでハいかぐハおぼしよらむ。かぶりもなく
人にのこうしづかしてなるハせ語へしバ世中忠
うちあかばさびしきこといかなる相とをしり語

いぬことゝりなり。えんにそぐろさむく。花のつゆを
もてあぞびて。世ハしぐすべきぬとおぼしたるかど
よりハ。おもかしひとのためなる道バ。をのづからおりぬ
しまつけつゝ。まめやかなることまでもあれかひ
志しせ給こそ。ありがたくめづらかなるすなるめれば。
いでやなどそしらけしげにきこゆ。はめれとなど
をありけり。わらハべなどのなりあぞやかなるらぬ。わり
おりうちまじ里など志てるを。女君ハいとをづかしう。
中々なる事まぬるも何るかれなど。人志道ずハおがれ
事なさましもあらぬに。ましてこれごろを。世にひ
びきたる御有様の花やかさまに。川ハ宮のうちの人乃

ゑしゆんことも。人げるきことゝ。おぼしみぐるゝこ
とをそひて。なげうしきを。中(慧)納言の君ハいとよくを
しもりきこゝなへバうとゝうしむあらちまハ。えぐるし
うくぐくしうりぬべきころ志ひのさ海も。いかゞ
づゝとはなけ進ど。なまかハことくしく志てそが得
なるんも。中〻おぼしたなく見とがむる人やあらん
と。おぼしてなりゆり。いま(慧)海ぞ又例のめやすきさ海の
ものゞをなどせさをのて。ばこうちきをゝせ。あやの
進う給はせなどし給ひ。此君(慧)しをぞ。家(旬)ものもな
とは。ゆゑ給ひ。さ海ことまうしづなしてられて。さ
なるまでころをぞりもし。世をなりひ出まして。

あてなるんぎ夜をこよなるけ是ど。故家の法山ぜこ
をみそめ給しよりぞ。さびしき所はあされさふ夜
ことなりけりと。こころぐるしうおぼされて。なべての
世をもおもひめぐらし。ふうきなさけをもならひ
給よりけり。いとおしの人なりしやとぞ。うくてな給
いでうしろやすく。おとなしき人をてやこなんと
おもふまもしるこがぞ。心をかくてくるしければ。法
文などをしよりハこ夜やうまて。さもすれば悪
びあまりしるけし。記みをつくしたまふを。外ぶい
とまびしきるまそひまふる方とおぼしなげうる。
ひとへにしらぬ人なりしぞ。何なれぐるおしとぞしれ

なめさしたれたんにをやしてうべき我むしかりさ夜
ことなりたのもしべにならひきて、いまのさらにあるう
あしうなるしむを、中こ人めいしうべしさすがに
いきたうまもあらぬ此こころだん何りさ夜のおも
れを志らぬまはあらず、さるととてこころかけしが
かにあへ志らりんも、いとつくましくいうぐいまべから
むとよろげに志ひそぐれ給にさふら女人ぐもすえ
しものいふひありぬべくわうやうなりはみなあ
こゝ志き心ちして、こゝのひなれたる人とてはかれ
山里のふる女げらなり、志ふことををおるじんにあるう
うしう、いひあはすべき人のなきまくに、故姫大君を

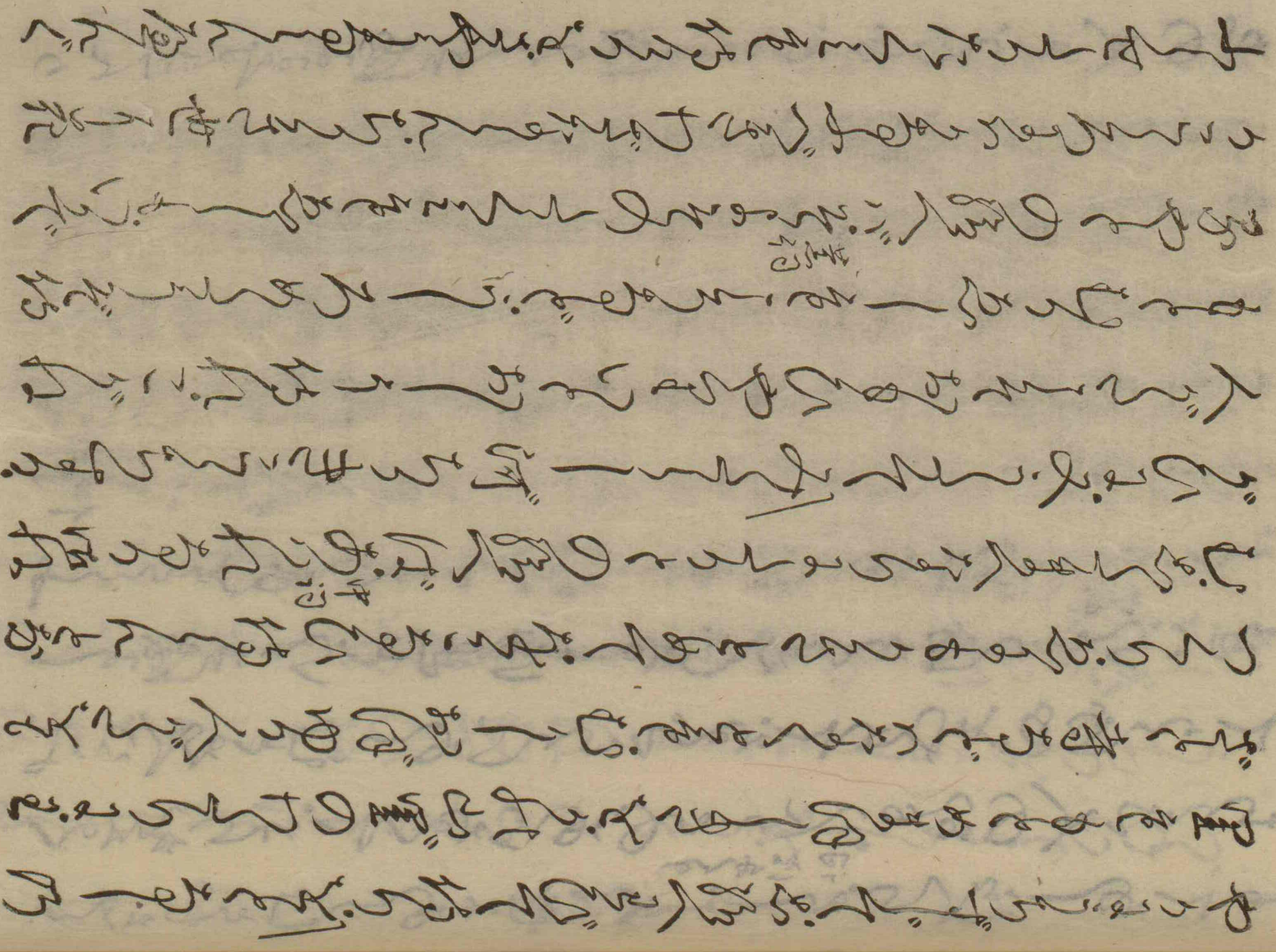
おもひいできこえ給ちぬれりるし。おりせましかば
これ人（業）もかく御心もそへ給はましやと。いとうなし
う。文（匂）のつらくなりぬりんなげきよりも。はくといと
くるしう。荒西。おとこ（業ん）君をしぬて。しひまびて。例の
しめやかなるタつくさおりしたり。やがてたしま御志
とねさしいざさせぬて。いと（中詞）なやましきかどまて
なん。えきこしさせぬと。人して。男しいだし給へる
をきくま。いうじう（業ん）つらくて。泪（なぎ）のおちぬべきを。人
めまつらめば。しぬて。まぎらりして。なや（詞）ませこま
ふれりは。しらぬ傍などをちらくまいりうるを。くすし
などれつらまてもんをのうちまはさふらぬまじう

やはらく人づてなりけれきうそこなるんうひなき心ち
其家ときこしなて。いとものしげなりけれ。なし
海を。一夜柏の気色こそ人ごげまやいとみぐるしう
侍めりとて。もやのこすうちおろして。よゐれ僧の
ざまいまなるを。女若(けん)ましとは心ちもいとくるしけ
まど。人のかういふようこそ々ちえんなるしむを。又い
うごとつましけまば。柏うなづらすこしゐざりいで
そくらいめしゐへり。いとかのうは時ごものの乃給ふ所
聖りひの。放(蓋ん)大君れなやこそめ給へましころまげお
もひ出らるしを。ゆしううなしうてうきくらす
ふち志ゐへぞどんは柏もいとれぞらあらひつくぞ

いとなづかしうて。むかしは（中詞）いつともなくうくこそは侍ま
むかしの人（大）もさこそはものし給しが。ちかづ御まじ記
人のまゐわざとか。人をいひ侍めりとぞの給ふ。げに（豊ん）
これもちとせの松ならぬよとしかまほいとこそ給
ぐらしう衰なれば。これめしまをしろ人（かね）のきたんを
つまれず。うたはいこなきぢれこと紙こそえりと
どむれ。むかしよりしきこゆりけまなどをかれ法ん
こひとりはいふえさせなるがら。人はみうたまもきて
まじ記さ海によくめやすくぞいひなし給をげに
ありがた記法こころぞへはもとき（かね）ねこりかり。なは（地）
なすはつけてを。故（大）若れ法なすをぞ法きをぞしぬ

へ侍いたけるらしかどよう世中をしひたるれて
やこぬべきんづらひとのこるらひ侍しをさるべ知ま
屋侍なんうとを抑らをろうなるらば心うめなり
しひとふしまかれかいのひじりもんもさすがに多が
ひやしまなん。なぐさめだらまこまもうしこまを
りうづらひて。ひとのありさ海をこんにつをてま
ぎるくるもやあらむなど。おもひよりおりく侍
進ど。さらにかかざ海にはなびくべうも侍らざら
なり。よろげにしぬへわびてに心のひくうこのつに
うらぬわざなりなれば。すきが海しなやうにおぼ
えるらんとたづしけ進ど。あるまじ知こころ乃。

しけても侍らばこそめざましうらめ。こぐらぐらり
のかどまで。時ぐおもふことをも聞てさせうけぬ
などしてぺぐてなくの給りよいんをこれりハとぶめ
いづべき世の人まゝぬろろの程ハ。凡ゑ人まもど
うるまじく侍りを。粗うしろやまくをおもほした
まるどうらみくなきゝきこゝ給うし（中伺）詠める
くもひ聞てだらくあやしと人も凡おもひぬべ
きまでハきこゝ侍りべくや。年比ごるゝりなるま
つけつゝみし侍るすぐを此侍しりばこそさまのこと
なるこのりしびとまて。今ハこれよりなどさへ。れ
ぐろうしきこゆまとの給へバ。（恙伺）さやうなりおりも



やりまうちずじて忠義へまびて侍り。そとなし乃
里をもとめまほしきをかれ山里のわたりまま
ざと寺ちどいなくとをむりしおぼゆる人がたを
つくり忠まもりきとめてなこなひ侍らんとか
む。忠たまへなりまたりとの義へば。あれ（中詞）なり此ね
がひまゝ又うしてみたらし河ちりきこうちする。
人がたこそおもひやまいとおしう侍れ。こがね
もとむり忠しをこころなどうしろめたうぞ侍
なやとの義へバ。そよ（業詞）そのたくこをもしもいうで
うこころまいりなふべきわざなりんちりき世ゝ花
ふしせたりたくこを侍りをさやうなりん為んぐ

忍の人をがなかなど。さき海かうぞ海にまゐすまんか
さたのきよし。浦なげき給へし。それのいと心ふかげな
海もいとおしうわづらいしうて。い(伊)海をこしすべ
つまりて。人(詞)がこれつゐでにいとあやしくしひよう
まじきるをとそしいで侍れとの給けれひの寸
こしなつかしれを。いとうれしくあれまて。何(芸詞)
ごとにいふまゝに。あ丁れしてよりまをとゝふ
道バ。いと(ゆん)う海さくしひなら海道どいつさ海にし
てかゝ海心をやりてなぐらにあしむとしへバこれ
ちかき人のおもいんことのあいなくて。さりぞなく
もてなし給へり。さしぞ(詞 浮無る)ろハ世にあしむともしろ

ざりし人のこれ家ばとしきところより抱して。為

ざりし人のこれ夜ばと聞きところより抱して、夜
づまいでたりしをうとくハしゆまじけれど、まる
うちつきまさしもなまかはむつびおもいんとし給
し我ざいけこゝろきたりしそおやしきまで、む
かしの人(大)の法はなひまかよひたりしが、衣におぼく
なり給しが、かゝ(葉ノ中と)見なるどかうおもなりしの給めるハ中
くなるまゞをあさましうもてなるれたりとなん。
みな人ぐもいひ給しをいとさしをこゝろまじ紀人
のいでかハさハありけんとの給を、愛(ゆめ)がたりけるを
できくざ(詞)なべきゆへあれバこそハざやうまもむつび
きこゝらなら先なるどかいまんでくもかゝめ給を

ざらんとの給へば・いさや（中詞）そのゆへをいりなりけん
ことくもしわり稽侍らば・ものたりなきありさ國
ぞもまて・世まおちとまりさぶらへんとすらむこと
とのゑうしろめるぞまおぼしらしとぞをな・
たゞひとりうきあけめてしひしられ侍りまする
あひなきことをさへうちそへて・人をきてつる屋
んこそ・いとくおしうぶけれとの給ふ氣色をも
（芸ん）ふ（八）家の悪びて抱などの給ひけん人の志乃ぶ
ぐさつゑをなくちけりなるべしとうしまぬ（芸詞）まるち
との給ふゆりは見てとまりて・かぞかりまてをれ
なじうハいひまてさせあてよと・いぶかしがり給へ

ど・さすがよくこいらいこくて・えこ海くまもきこてぬ
いぎ・ふづ〇むとおぼせんあらだ・そのけらりとは罕
え法べきれど・くりしうハしをえしらぬや・まこあ
まりいらぐ法心をとりをしぬべきことまるんとの
ぬへバ・世とうえなるまをむのありうらづ〇まハこて
ろのうぎりすこえぬべきを・いとさまでハしこまへ
らうべきまハあらざるれど・いとくたすぐさめんか
こるまきよりもとしより侍う・ひとがこのねがひぞ
らまはなどてくは山里のりんぞんまもおもひ侍
らざらんな後たしうまの給ませよとうちつけま
をめきこて給・いさやいすしへの法ゆうしもなりし

わざをかれとおもひ給へ家とえうえつゝけ給ど〔慧心〕さ
まゞはおかれなうおぼつかなし記ことハなくむつま
へ給ものゝさぜせうはりしさるさき海まへえもて
あし給ものをかえきうなへうはこそたとおほかん
ときめ紀よ夜もいそう定切とぢ〔中心〕らまは人めい
とうくりいてえておもてうちたゆめていう給
ぬ色ハ〔慧心〕おとこ君てとかうとハ西てむへど程のとう
らめしうくちおしきまゞむすつめんうきもあすき心
地してふ海のこぼるゝも人もろかれバよろづけまむ
ひみづ海色どひてかうはあおそうあらんもて
うしさくなすといとうしそてわづためもおひあるる

べかればねんじ過してつゆちもあげざりけり
すそ出ぬぐくのことをひてハいでずべうしんく
ほしうをあべいうぶいうかしてハおほさ乃世
のもじれあつまじきけちまでざすざまぢふられ
うるぬわざとバまべうしんあじおもちさちえんし
まうえるあるしねバまややがおめ人のさめもて
ろやめそるまじきてと候さりあるくおぼしあず
［注本ノ字］まうりとのくまへる人ともいうでハ海しとをと
ハえろべきさぞうぬきえるれだおもよしもよ
くうつハおしびるをひとぬかいまもおもずハう
浮きくしそはるべかれあまだなとそ［注本ノ字］ふるしけちまえ

ところはたらず守治のさやと久しうさあのハ対ハ

ころもたゞず。宇治のこやを久しうこゝのゝめ時は
いとゞむかしとをくなるゝしてすごろにゝがう
けまだなすが月廿よ日乃かどにおりしこりいとゞ
志く風のこゝ吹たらひて心すごうあらましをなる
あれをものこやどもりまて人げをみしぞこゝろに
まづうよくらしうるしきるすゞりぞりなる弁此
あまめしいでこれバ。ぢうじぐちにあをまびの末
丁さし出てまい出り。弁詞いとかしこかれどましてれ
そろしげに侍出バつてましくなんとまゐにハ出
こぞ。蓋詞いうなるゞめ給らんとしやうにおなじ心なる
人もなるさ物語もきこしんとてなんぞうなくも

つまりそし月かれとて、涙をひとめうけておハする
ま、老(弁ム)ぐハいとゞさしにせきもあへず、人(詞)のうへうて
あいなく地をおもかれめりし此のそらぞうしと、花
もひなへいづるまいつと待らぬ中にを、秋の風ハみ
ましそてつらうおぼし待て、げまられる(大ノ)げうせ給ぬ
つましを、志るき世中此所何りさ海とかのうまう
け給もさ海ぐまなすどきこゆれバ、どあ(慧詞)ることもか
ゝ涙るすもちすぐしふ事バな、我るやうをあるを、あぢ
きなすくおぼし志をくんしろ、けがおやまちのやう
ま程りなしかれ、この比の此有様ハなかふうれこそ
よれつねなき、されどうしろめるこげまいこそをこそ

あハざめり、いひてもくむるし程宣まのがりぬる

よれつねなき。これどうしろめるけよいえしきこそ
ものはざめり。いひてもくむるしは室まのがりぬる
くゝりのことそこれものがれぬるすなぐらをくれ
ひきごゝりかどは粗いといふひなりなれとても。
まるなるき給ぬあざりめして例のかれ法忌日の種
かとけのことなるど乃給ふさてこゝにくく時ゝもの
もるまつるてもかひなきことれやそらばおぼゆ
家がいとやくなるをこれもんぞこがちてかれ山
寺のうるからまごうたてんとなんおりふをおな
じうはそくいじめてんとれまゐひてだういくり
らうどもそうだうなどあるべきことぜかさいで
の給ひなど世き世給をいとたうときことしきこそ

志ゝ年・むりしの人乃ゆへあるは正まゐに志めつくり給
かん所をひきこがこんもなさけなさやうなれど・
それはこころざしも・くどくのかたにはすみぬべく
おぼしけんを・とまり給ひん人ごとおぼしやりて・え
さはなきて給ハざりしまや・い海ハ兵部の宮の中乃
うこそハ志り給べかれバ・かれ宮の御つやうとをい
ひつべくなりにしち・さきバこてなぐら寺になるさん
ことハびんなるべし・ゆるまうをてさもえせじ・所
のさ海もあまりに川づらちく・げとうにもあれバ・
な代志ん殿をうしなひて・ごとざ海にもつくり
うへんのゆまてなんとの給へバ・とさ海かうざまに

うへんのゆまてなんとの給へバ・ときあきりに海かうざまは
いともかしこうさうとさはこころなり・昔われを
かなしこそ・がばねをつくこそ・あまくれそしくびは
かけて給し人を・佛のはたらぎ爲んまてかれかぎれ
のふくろとすてくつぬまひじ里は道をいり給
里はなる・これしん殿をはらんぞろはつけて・はこ
ころうぐ紀おりしますしん・ひとへはこいぐしき
はなすなり・まさ後世のはしてめともなるべきこ
とは給なり・いそぎ法かうまつらすべし・こまこ
のたらせはえしひ・ひして給しん日をうけ給て・
柏のゆへしりこんたくこ二三人をのりてご海
かなることぐもハ・仏のはなしへのまくはつかうまつ

らを得しんと中せ。もうく（恵詞）れこまひさぶめてみ
さうれ人ぞをめして。これかどのことぞを。あざり
のいんんまくよしべきよしなどおかせ給ふ。たゞ
なくくれぬれば。その夜ハとぐまりぬぬ。しゐ（恵ん）ぬび
ぢらしそハみめとおぼして。こちめぐりつゝ尺給
へぞ。かとけも見ゆ。これ寺ようつしてがれば。おま
ぶのをこなひのぐれこあり。いとくるげよすまぬ
さるを。家よいよしてまぐすしんとこぬふ。（詞）これ
しんでんハへてこつ夏さやうぬ。つくりいでんか
どハかれらうよ拘し給へ。京の君よとりけこさるべ
き拘などあらバ。法さうの人めしてさるべからんやう
まものしぬへなど。まめやうなるなぜをかこらひ

き抱などあらバ。はさうの人めしてさうべうらんやう

まものしぬへなど。まめやうなるすぎとうこらひ
給。かうまてハうだうはぐさすぎたらん人をなほ
うと見いれ給べきまもあらねどよろもちくふせ
て。しうし抱がうりなどをさせ給。故権大納言の君は（弁二）（ごんこいなごん）（柏木ノ事）
はありさ海をきく人なきまふ。ふやせくていとこさ
やうに罪也。今（弁詞）はとなり給し御どまめづらしうお
りしますらん。はありさ海をいぶかし。れ抱まおもひ
罪しさせ給めりし。はかし。れなど。れ。たもひぬへいで
らるしまうくしうけ侍らぬ世のもしまうくてこそ
里侍りなん。かれ。はせまむつましうつうまつりを
きしきるしのをのづらう侍なるとうれしくもふ

志くも志ひこまへ志られ侍る。こころうな命のかど
まで。うくさ海ぐれるすを見ぬへすぐし忌給へ志り
侍るなん。いとまづうしうこころうくなん侍る。宮(白)より
を時ぐいまいりて見まれ。おぼつかなくこえもこりえ
てぬるいこよなうおもひへだてなるなりなど。
の給いするおりく侍れど。ゆゝし却分までなん。酒
えぐ佛よりかゝよいみてまつらまほしき人を
なくなりまて侍るなどそこゆ。故姫(大)君のはことぐも。
たゞつなもせば。そし比のはありさ海などうらて。
なまれおりなまとの給し。それもみぢれいろをみ
てを。たゞなくよを給ひうらうらなどと。はき

てをたゝるゝよそ給ひうこゞしうるどとぞき
なからぞうちわるゝきたれどうゝるゝまうあり
うことずくなる御抽ら。おしりゆる人の御まて
ろぞへ御れとのゝいとゞをてそへ給（兼ん）。宮（旬）の御（中）ことを
今すこしいまめし御抽ら心ゆゆけぐらん人乃
こゝめはたしこゝるくもてかし給つ面くこそもれ
し給めりを。我はいとんふくなさけくしと
いゝんていでゐしてんとこそ思ひなへ進るど
心のうちにおもひくらべ給さて抽のつゐでにかれり
こ志（うさ丑ノ子ヨリ）ろれるをといひいでなへり。東（弁行）にこの比侍らん
ちえ志り侍らば。人づてにようけ給りしるのす
ぢなくなる。故（八）宮のまゝごうゝ御山ずこも志なりず故

山のうさうせなへりなりかどちりなりよろ。中将の（うさ・母ノ母）
君とてさふらひなる。上らうのんだせなどをなし
うは侍らざりなるといと志のびて。たりなる程は
他の給はせなほと志り人も侍らざりなるは。女法子
となんうえて侍なるを。ざ（ハん）もやあらむとおぼしそ
とれありなるならは。何いなくわづらりしうもれし
きやうはわがしなりて。まことを法らんじいて
てとを侍らざりなりおいなくそれことはおぼし
こまてやがておほなくひじまにならを給ひは
けるを。（中将宣ん）たしこなくおもひて。えさふらいぜなりに
なほが。えられくのうえれめはなりてくぐらなほが。
ひとくせのがりて。それ君たいらうは抱し給よし。

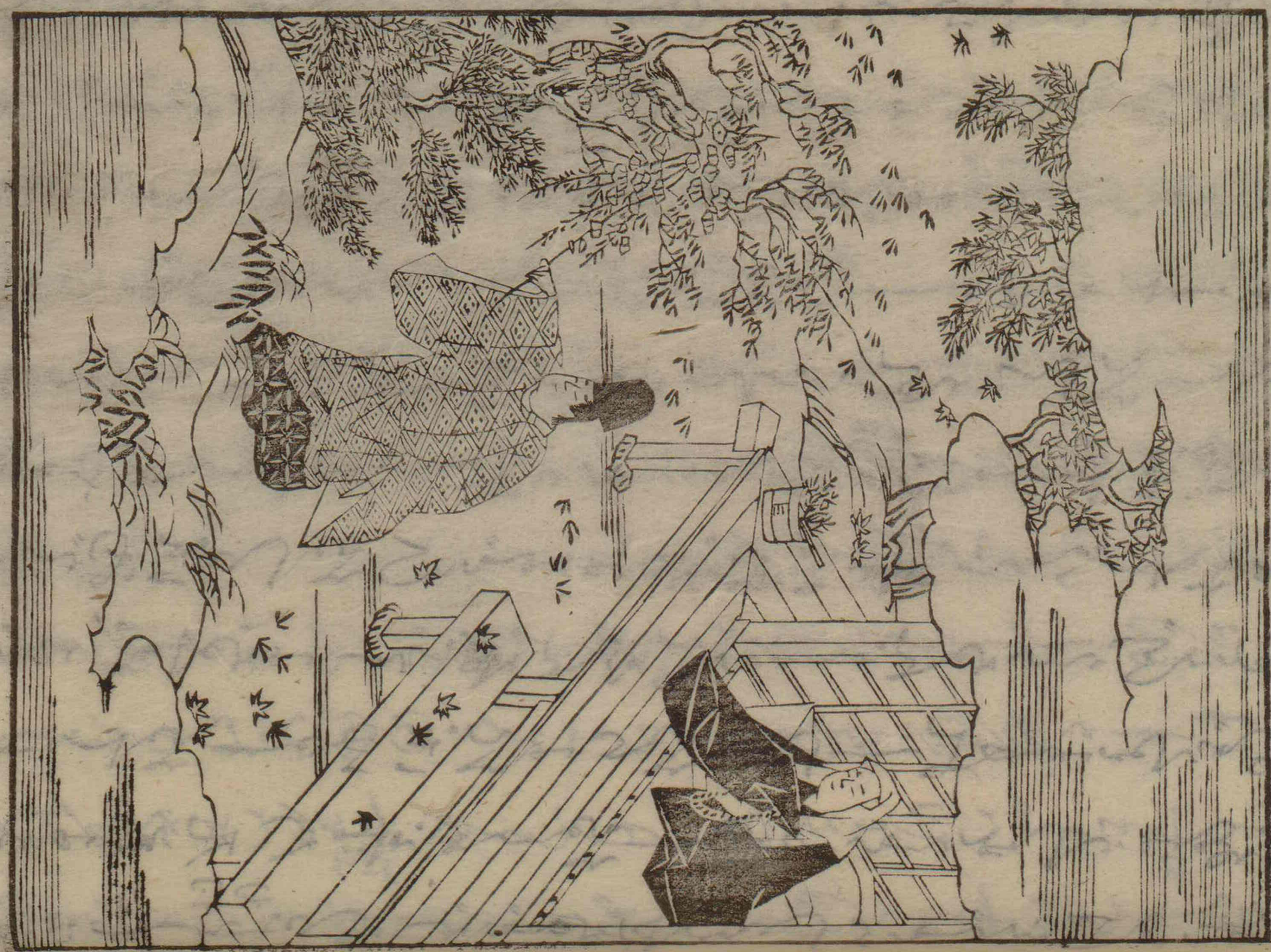
ひとく世のがりそれ君たのしみは抛し侍らし。
はやうよりかのめしやうろをぞさくしめし
つけて、さうまう侍とうろこあるべきこととすゝをあ
らずとの給ちせさせちられが、ひさくてたのんがみ　中お君
げきき侍らうる。さそまゝてひてちよふならそくぶち
侍らよ名のが。はもし此なとふもいきて給ふざらく
家が此妻のがりて、られ家はわれづものようち
なるとたのんかのきて侍しられ君のとしいざいろち　浮舟ろし
ぞうりよあら給ぬぐんうし。いとおしげよおとひぞ　八と大との代浮ろ子
給ふが。かるし把つとるどもそ中ごろの文よさんか
きつげてなりんとくべやうしとや。内ゆ。くりしう　薫人

きゝあきらめまして。ぢらが海ことまてもあらんか
し。みぐやとおりふんいでき。ぬ。(詞)むしの御けいひは
うけてもふれさしむ人は。志らぬくままでもこゞ。
志らまほしきこゝちもあるを。うぢまへぬかざる
ゆれど。志ふまゝうぢうきさ人にてそいあるれ。わざと
いるくとも。此わらりまをとるふおりはらむつゐで
まかくなんいひしとつゝへ給へるどだらの給ひ
とく。母君ハ故(弁詞淳和ノ母)ハかゝるの御めいるり。弁をとるれぬ
るうらひは給べきをうれかゝへかりくは給りて。
くりしうも見給へるれざりれ。さいつゝろ京より
たいかがりとよりやしらしハかれ(淳和)志なんいうで

たいふがもとよりやしろしハ。かれ君なんいうて

うれはたゞにぞまいしむとの給なり。ちうんを
よるど待しかど。まぐこゝにさしもへてはをと
るかず待めり。今さらばさやうれつゐでよ。うゝ御
おほをぞするどつゝへ待らんときこゆ。あけぬ
まばへをぬかんとて。よべなくれてもてまいま
ゆ。きぬわるるどやうれ抱。あぐりをとくら世給ふ。
あま君にもぬふ。法師がらあさぐ君れげをどもの
まうにとて。布るどいふものをさへめしてこぶ。心
がそきまゝぬるれど。うゝ御はとふらひこゆさ
ざりかれば。分れかどにハいとめやすく志めやうまてな
むをこるひかろ。おぐらしれこへがこ起まで吹とを

したるに。踏る木ぞ。ゑをなくちりしきたるもみ
ぢを。ふゑかゝ海あとを見しぬをゑわくして。とゑに
をえいで給ひず。いと気色ある深山ぶまや。とりゝろ
つゝれ色ぞまぐのゝりゝろ。こゞになどすゝしひき
とゝを給て。家へ中おぼしくてもゝせ給
業屋どり木とおもひいでずかこれもとの様も
いりまさびしゝらましとひとりごち給をきて。あ弁
まぎゝる
弁あれもつるくち木れもとをやどりきとおもひを
きゝろかどれゝなしさ。詞くまでゝあるめきゝれど。ゆへ
なくはあゝぬとぞ。いさゝゝれなぐ。ちめにはおぼされる



中こやまもみぢ葉してまつ道おへれば。おもとに家おかし白
ますかどたちより。こゝみれ家ありとてあるまいごろ
をなくもてまゐりたると。中女君例のむつかしきこと
もそそとくるしくおかせど。どうくさむやはいや白詞
おかしれつきられど。こゝであるしれの縁でめしよとそ
こ縁。けれみこまは文詞見せるまでとりおかしますらん。やまま堂
まゐりて。いらぬ筆の節ぎりまゝひ給つる。流抱がくり
をこげくるん。うしこれきん殿。ぶうまちるすべきござる。
わざきまもれしつを給りまれ。流ゆるし給てころ
いおまうつそことも抱しめ。弁乃尾君まさ
べきかはをじといつくせるどろある。よめしも流道白詞

まきのへはかこかれ。まろありとぞきこつらんとの
給も。すこし（ゆ）はげにさやかりつらん。女君（中ん）はことなれを
うれしと思給に。あるがちにくの給をかりなし
とおぼして。うちゑんじてゐ給へはれさ海。よろ
げのつゝもゆるし川べくかし。返（句詞）るすかい給へ。え
じやとてかゝざ海にそむき給へり。河（中ん）まへてかく
ざしむをあやしけきが。山里（文詞）のはありきのうち
やましくも給れ。うしこはげにさやうにてこう
らくとも給へしを。ことはちに又いはれ中を
とめんらりは。あらしもろまじうも給りを。いら
まをさはべきさ海にちきせ給ひ。とろかるらば

なんときこえ給。かうよくきかし紀もなき御
しろびなめりと見給ひながら。ウ(白ノ)がはこころな
らひに。こぐなるじとおぼすがやまらぬなるべ
し。かれぐなる前栽(せんざい)の中に。おだれのもれより
ことに。手をさし出てまゐくがおしうこゆるに。
まるかに出さしころを。露をつゝぬきとむる
むれを。たゞなげにうちなびきなど。例のこと
なれど。夕風な紀ありれなりし
(白)かはいでぬもれおもふらしものずきまま
ねくたもとの露をしげくして。なつ(白)かしれかどれは
ぞどもに。なとしどりき給て。琵琶をひきの給
へり。ウうしきでうれかきあるせをいとゆかれに

ぞどもはなとしどりき給て琵琶をひきの給
へり。けうしきでうれかきあるせをいとゆかれは
ひきたるしぬへば。女君(中)もこゝろはいりぬへかゝると
まて。そのあんじもえしくて給ずちいたされ
本丁れつまより。けうそくはよりかゝるまて。かのかは
さしいでぬへは。いとゝ海かしくらうこげなり
秋(中)たつのべれそしきもしのぞくきかのめく
風につけてこゝろしれ。月が身ひとりのとて漁ぐ海
ゆしが。さすがはたづしれがあふぎをまざらえ
しておかすかこゝろれうちのらうこくをしたる
らゆきどうらゆまとそ人もえおもひくたるざ
らめとうこゝがしきがたゞなるでうゝめしれ

なめり。菊はまぐよくもうつろひそぐ。けざとく
ろひこそさせなへるを。中々をそきは。いろなひ
ともとよりあらん。いと人所にてうつろひこるを
とりけきておらをなりて。花（句詞）の中よひとへまとずし
給て。なまがしれみこの（西京たち名のこと）。これ花めでころ夕ぞかし。い
ましへ天人（あまびと）のかけアて。びそのまとしへなるはなり
ごとをあさくなりまたる世は抱うしやとて。はこと
さしをさ給を。くちおし（伴ん）とおぼして。ふしそ（詞）あさく
をあらめ。じかしをつくへこんことさへは。などてか
さしもとて。おぼつかなきてなどとゆしげり
おぼいたれば。ざらば（句詞）ひとりごとはさうぐしきは。
さしいへしなへしとて。へめしてちうの御琴

かばいたれば（白羽）さらばひとりごとはさうぐしきま。
きしいへしまゐへりしとて。人めしてゆうの法琴
とりよをけをて。ひかをこそまつりたまへど。（中羽）昔こ
そまねぶ人（ハ）抱し給しど。たゞぐしうきくをと
めぞちりまし抱をとて。つましげにそもかき
給ひねば。（白羽）かぞかられるまも。面ごそ給へ所しうころ
うかれ。この比見るあらはまぶいとんとくべきなど
まもあらねど。かたちなりなうゐことをもかくさず
まそなれ。まべて女はやいらかり。こゝろうつくしれ
なんよきことしよう。それ（蒸）中納云もさぶひめり
しがかれ（蒸）君まゐる。かうもつゝ給りじ。こよなき
法中なめればなど。まめやかにうらみられてぞ。

中うちなげきてすこしまゐへぬふ。ゆゑびとりれ
ば。がんしきでうはあるを給。うきあるせなど法
まをと。おしうきゐ。いせ句のうこうこひ給ふ法
しきのあてはおしきを。女ぐらはものこうしろ
はちづきまいりて。しきひろごりてぬるり。ふる句ノ
ごろ内ノ女ごと詞れこしますそつけ是ど。それもことゆり
なれば。粮ひがおまへとば。さいたいべとこう中さ先。
かしはれあるさ海はまじらひ給べくもはしぎりし
そしごろれは。まゐをまゐ。まゐくりる海なりしげは
おぼして。の給はするこそいとこころうけれなどれ
ぐいひはいへば。ひるまゐ海やとせいす。法

ごいひにいへバ。けうきんごい。何なる海やとせい寸。此

ことゞもそしへそまつりなどしつゝ。三四日ニ一ツを
里おろして。此拙いみなどことつけ給を。かれ取
まれ。うらめしくおぼして。かとゞうちより出給け
海まくに。こゝに海いりこまへれば。家ことくしげ
なる海して。なましにいましつるぞとよと。むつ
かりぬへど。おなしにわたり給て。たいめし給。以羽と
なりなるひなどは。この院をこたまへで。久しう
なり侍りを。衣にこそなど。昔の此拙繼など。すて
しきこゝ給て。やがてひきつれきこゝぬて出
給ぬ。此こども此取がらさらぬ上ぎ。取上べなども。
いとおほくひきつゞき給へ。此いきなひこちこれ

そろりに（ゆノ女どもん）ぶべくもあらぬぞくいこがりかん
ごのぞきて見まりて、さもきらるにおかしけれ
もごかな、さばかりいづれともなく、ひうさりまて、
きよげにおかしすれにどもれ、まのべきもなり
りり、おなめでこやといふもなり、又さがりやん
ごとなげなれさぬまて、ひざとれひんにまいり
こまへぬこそまくけ是、やまげなれ世やなどう
ちなげくをあるべし、れ（ゆん）身づからもきしうこと忠
出るよりもじめ、かれ花やかなれなるらひにこら海
じぬべくもあらぬ、かすかなる身のおぼしをと、いよ
いよいぶかうれど、なを心やまくこもりぬなんの三

ことぐもそしへそてまつりなどしつく。三四日ニ至
里おもして。此抱いみなどことつけ給をられ（六去）殿
まれ。うらめしくおぼして。（夕）おとゞうちより出給け
御まくに。こゝに海のりこまへれば。（旬ん）家ことくしげ
なる海して。なましはいましつるぞとよと。むつ
かりぬへどおなしにわたり給て。おいめし給（又羽）しく
なりなりなるいかどれ。この院をこたまへで。久しう
なり侍りを衣にしるゝ。昔の此抱御など。すそ
しきこそ給て。やがてひきつれきこえぬて出
給ぬ。此こどもれ殿がらさらぬ上ぞ殿上人なども。
いとおほくひきつゞき給へ。此いきなりひこちこれ

そこらに（ゆノ女どもん）ぶべくもあらぬぞくしいこがりかる人
ごのぞきて見まりて、さもきらくにおかしけれ
もごかな、さばかりいづれともなく、ひうさうきりて、
きよげにおかしすがれしどもれ、まのべきもなかり
かり、おちめでこやといふもなり、又さがりやん
ごとなげなるは、さぬまて、ひざとはひんにまいり
こまへぬしそまくけ是、やまげるれ世やるどう
ちちげくをあるべし、は（ゆん）身づからも、きしかくと思
出るよりもじめ、かれ花やかなるはなからひにこちぬ
じぬべくもあらぜ、かすかなる身のおぼしをと、いよ
いよいぞうれで、なと心やまくこもりぬなんのこ

いよいぞうれだ。ちと心やすくこもりぬるんのこ

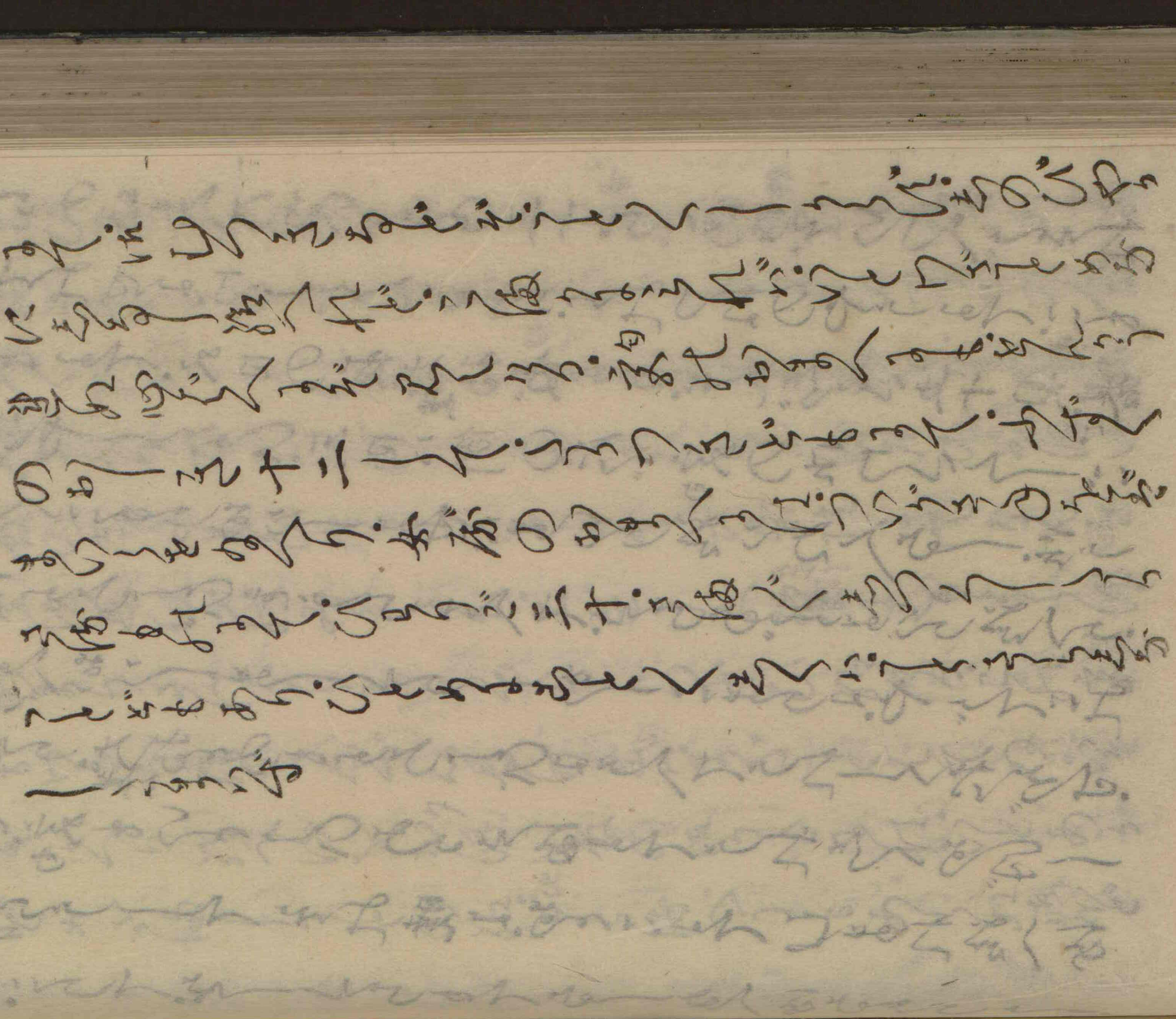
こそめやすからめるどいとゞ笑し給。ちゝなくて
としも蓋(蓋廿三歩)ぬ。此月のつごもりがたより。れ(中)いなら
ぬさ夜になりやこのを。(白)家まぐ法らんじならぬ
るまて。いゝならむとおぼしなげさて。こゞほう
るど。前々まてあゝこをさせ給。又こちじめそへ
させ給。いといろうけづらひのへば。(ささい)后のこや(明石中文)よりを
法とふらひありゝくて云とせまなりぬれど。一所
の法ぶざしこそをろゝなるね。大かたの世まはもれ
くしうもてなしきこゝしき給はざりつるを。この
おりぞいづこともくさこゝしめしおどろこさて。
法とふらひどもこさこゝし給ゝ。中(蓋ん)納云の君ゝ。(白)家の

おぼしさらぐらんまもととぐ。いまおりとんとな
げさて。こころぐるしくうしろめたくおぼさるれど。
うざりにのるはとふらひだりこそあれ。ほまりもえ
まうで語りず。思びてぐはいのりなどもをさせぬ
なる。さぬハ女二のまれはもぎさうでこれ比になりて。
世中ひじきいとなきのくしるよろ所のるすみ今上ど
乃はこころひとつなるやうにおぼしいそげぞ。御
うしろもなさしをぐ。中ゝめでたげに見てゐる。
女二ノ母
女はのしをさき語へぬるすどもハさる物にて。法くを
どころさるべきずなやうどもなどそりぐにつ
うしまつるすどをいとかざりなし。やがてそれ

かどにまいりそめ給べきやうにありければ、おとこ
がこもんづかひし給ころなれど、例のおとなれば、
そちらこばまにいんをいらで、これはことのこいとに
しうおぼしなげる、二月のついたちごろになを
しぬとういふことに、權大納言になりて、右大將は
給ひ、右のおほい殿左にておはしけるが、志くなへ御
ところなりけり、よろこびに所どありさ給て、此文
まもまいりなへり、いとくるしうしなへば、こなたに
おはしますなどなりければ、やがてまいり給へり、僧
などさふらひて、いとびんなるなりこまとおどろき
給て、おぎやかなるはなるとし、はしこがさねなどな

里ひきつくろひておりて、こうの（答）ちいし（拝）給ひありさ
海どもとりぐにめでたし。やがてこよひつきの人に
ろく給。あるじ（薫）れ所にと、さうじ（白と）なり給と、なりやゝ給
人（中）によりてぞおぼしゝゆゝひなめ海。左のおほ（夕）い
殿のしたまひなりまゝにとて、六条院にてなんを
今海。忘じがれみこゝち。上ぞ遊ア。犬饗（きやう）にとゝらば。
あまりさはがしきまでなんつどひ給なる。これ家（白）
もいたり給て、しづんなけまじ。まぐこともてぬに。いそ
ぞうへり給へ海を。おほ（夕）い殿の御かたにはいとあり
ぞめざ海しうとの給。と（比）ゝ海べうしもあらぬ御ぞ
なりと。こゝい海のおぼえのちなやうさにおぼし
とゝりて。をしこちもて。なしなへ海なありし。

とぶりて、をしたちもてなしぬへ御なめりし。
中ろうして、それ暁に、おとこまてひまれ給へ御
と、家(旬)もいとりひあるさ海まてうれしくおぼし
たり。犬(蒸)ねどのもよろこびまろへてうれしくおぼす。
旬よべおりしましたりしかしこまりに、やがてこれ
はよろこびをうちそへて、ぞちなぞらまいり給へり。
くこもりおりしませばまいり給ひぬ人なし。御う
ぶやしなひ、三日は例のたゞ家(旬)の御けしきしご
とまて、又日の夜、犬(蒸)ねどよりどんぢき五十具、碁(ご)
てれぜに、けうぞんなどはよれつねのやうまてこ(中)も
ちのおまへ乃つかぐさ。三十ちごの御ぞいつへがさね



七日の夜は、后（きさい）の家（昭君中家）よりれ法うぶやしなひなれば、
まいり給人ごいとおほかり。家の大まをたじ絶て。
殿上人上達ゆかずまいらぜまいりぬへり。うち（今上）を
きこしめして。家（白）のいしめておとなび給なりまは。
いでかはとの給たせて。法たしこそまつれ給へり。
九日もおかい（タ）殿よりつかまつらを給へり。よろしか
らぜおぼすあらなりなれど。家（白）のおぼさん所あれ
は。法子（タノ）の君ごちなどまいりぬて。すべていとおもふ
ことなげよめでこかれば。法（中山）こづからも月ごろ物おも
いしく。心ちのなやましきまつけても。心ぼそうた
がしけうつるよ。かくおもごしういまめかしき

ことぞをれおほかれば・すこしはなぐさみもやしぬらん・大(芸)ねぬ殿はかくのこおとなびたて給めれば・いとゞ我
かさぎ海はけどとくやなまらん・又(句)宴のはんざしも・え
とゝろかなるゝじとしふはくちかしかれど・又ちゞ兎
よりのふをみてをおもふまは・いとうれしうもあり・か
くてそれ月廿日あまりのかどまぞ・藤つぼの(女二)宴
乃はもぎのことありて・まこの日なん大(芸)ねまい
里給ふ・それ夜のことはしのびこうさ海なり・あめ
のしたひゞこさて・いつくしくみしつるはかしづきま・
こゝ人のぐしこてまつり給ぞ・猶あるずこゝろぐ海
しくこゆる・さ海はゆるしはありなぐらも・たゞいまかく

しをいそがせ給まじきことどうしと。そうしら
りしげにおもひの給ふ人どありけれど。おぼしたち
ぬることすくくしうおりしまれ法んにて。そうしか
されたりしなさまでおなじくハもてなさんと
おぼしなさつるなめり。みどの法むをめえ給へる
人ハ。むしも今もおほかれど。うくさりの法世ハ。
たゞ人のやうに。むこどりいろがを給へ。ゆゑづひを。
をくなくやありけん。左のおとゞを。めづらしうつ
ゞる人の法おぼしをくせなり。朱雀院の法
をしまるしせなて。いまハとやつし給しさいにそ
れたゞみやとえてまつり給しが。つまとまいて

ひともゆうされぬ相を。ひろひ（落葉のす）たりしやとの給ひ
つれば。宮（落葉ん）ハげにとおぼしまはづしうて。はいへ
もえしぬハず。三日（女二 は祝云まて）の夜も大蔵のよりもじめて。
うれはうれんよせにまちさせ給へば。人ぐけいし
におほをごとなて。志のびやうなれどうれはどん
ずいぜん。車ぞひ。とねりなどまで。ろくぬるす。
それかどのことハ。ひろしごとれやうにぞあり
なる。（慧）うくてのちハ志のびくにまいり給。心（慧ん）のうち
にはなをひまれがしきいにし（大くす）へざ海のをおぼし
て。ひるまはしとおきかしなぐめくしてくる
是ハ心よりかりにいそぎまいり給もなるハぬん

地はいと拙うくらしうて海(女二と三条家へ)でさせしてまろ
らんことをぞおぼしをきてぐる。母家(女三ん)はいとう
れしきことよおぼして。(詞)おりします寝殿(しんでん)をさ
まて。ゆうしなりのべくの給へど。いと(恵詞)うるじけ
なくむとて。はねんぞごうれあかひはらりとつゞ
くて。つくらを給ましおもてはうつろひ給べなるめ
ま。ひんがしの廊ぞもちなどをやくてのち。うゐ
たしくはるらしくあらしきを。いよくみ
がきそへて。こまりはしつゝはれこゝろ
づひを。(今上)うちなもさこしめしてかどなくうちと
けうつろひ給りんを。いくとかぼしうち。(地)みんど

と罪ゆれど。心のやこはおなじことまなんおりしま
しかり。母家（女三）は此もとは（金上ノ）はつかひありかり。は此ふこは
をたゞ此はことをのこなん罪しさせなへりかは。
和朱雀院のちりはきてこれあまゝ家は此ことをば。
きこしとりを給しかば。かく世をそむき給へまど
おとろへぞ。なりまごとももとはまゝは。（女三ノ）そうせさを
給ことなどは。（今上ノ）かなしずこさこしめしいれ。は此より
いふ罪なり。かくやむごとなき此こころごをり
ろみまかぎりもなくもてかしづきさはがれ給。
おもぐしさをいかなりまゝあらむ。（苦ノ）こころのうち
まはつとまうれしくも見えしば。なをともすれぞうち

ながめつゝ。宇治の寺つくるすをぞいうがを給。家白
のわりぎこれいりまなり給日かぞへとりあて。それ
もちぬれいそぎをんにいれて。こ抱ひまりごなど
までこいれつゝ。世のつゝ。れなべてにはあらずと。れ
がしこころざしてだん。志たん。志ろう。こがねな
どみちくれさいくだもいとおほくめしさふら
ゝせなへば。われをとらじとさ海ぐれことゞもを
志いぞめり。芳づらも。例の家白れおほしまさぬひ
まにおかしこう。心のなしにやあらん。い海すこし
をもくしくやむごとなげなるをしれさへそひに
こりと見ゆ。今ハさりちもむつかしうらしすごろが

とるどハおもひまぎれ給ふさんと心やすくて
たいめしなへり。されどありしちがられ氣色り
まづ泪ぐらて心ゆもおらぬまじらひいとゞ心ひの泪
うなり抱まこそと世を心なへうぎ泪ゆるのうちん
まさりまたりと。おいぶちなくぞうれへ給いとある
海しきはことうれ。人もこそをのづら泪のうまを
もりきて待れなどハのうまへどかばりめでさげ
なりるどもまもなぐさ海ず。ワまれがうこうおぼし
給ふんかうさよと。養ま心さうて給ふ。をろうまを
あらずしひしられ給。おりをましかばとくちおしう
おもひ出きてしなへど。それも我ありさ海のやうに。

うしやうちく力とうしむべりそろうし。なまごとを
なぜなしでおせの人めしきこともあるまじかり
なりとおぼゆるまぞ。いとどうれうちけしてぐ
やうなんと。おひのへりし法心をきてはなをこと
まともくしうおいでられ給。ワ(蓋ノ)君をせちまゆし
がりきてしあまへば。(中心)とづかしなれど。何かは面ぐそ
がれまもあらん。まりなきことひとびまつるて。うら
みらしようおまは。いでこの人乃法こころまあがは
じとおぼして。ふびうはともかくもいふへ四のし給
たでめれたしてさしいでさせあまへり。(蓋)けらなり
ことなれど。まくげなしむやは。ゆしきまでもろく

うらしうてかやうは物狂しけるもこ語へ侍り
ほどなるは、ワがもみなてさまほしう、まくやましう
さも、世の物忘れがくなりぬるやあはれ。
たまでいふかひなくなりぬるし、大ひとのずれつゝ
のあき海すて、かやうなんひとともとどめときゞ
へらましかばとのこおぼしてばびびおもぶつきげるら
れあらは、いうしかるどいもなしぬるそ、はまりす
べたのこさ君のれんたまめれがくめ、きうねぢけく。
まもびるもてそいとおしうれ、きろワろびて侍
るしん人と、今上ころぞめそりワきせちよちうづけく。
しうび侍べきまあくじ物と海しとし侍るく

ざ夜の出こころをよてなどこそはめやまくものし
給けめとぞとしたる御べき（芸ん）げまいとくおさなれ
御どとんを給へるも義なれば思いよりは抽説など
こまやかにきこえし給かどは言ぬれば こころやまく
夜とぶよかすまじきを くるしうおぼゆれば なし
げくく出給ぬ（中ノ内ノ女詞）おしのひとの出旬ひや おりつれ
バちいかやうに 鶯をうぐ日きぬべかめりなどが
づらいしがるまりき人もあり 夜（なつ）よなるらば 三条の
文かこがるうこまなりぬべしとさだめて 四月
ついたちごろせちがんとういふるまぶ志きさ
きよりてしまりぬ あまとての日 藤（女二）つぼ（今上）よう人
りてを給て 藤の花のえんをさせ給こなるこれ日

きよけくしなりぬ。あまとその日。藤つぼよう人

けうらを給て。藤の花のえんをさせ給。こゝろまこれ日
さしのこれあがて。はいしこそこゝろ。おほやけけざ
まて。おほゆしの君やれつうまつりまゐりあらむ。
上達ア殿上人の飯(きやう)などゝ。くらづきよりつうまつ
つれり。左のおとゞ(タ)。按察(あぜう)の大納言(ゼウ)。藤中納言(とう)。左兵
(孔梅大臣ノ)(二人共ニひけ思ノ息之)
清種(かこ)。みこゝろ。三の家(白)。ひくたり(白ノ弟ニ)。二家などさふひ
給。こゝろまこれ庵の前乃もれのもとに。殿上人の座(ざ)を
しつり。こうらうでんのひんがしまがくどころ。れ人を
めして。これゆくゆどまそうでう吟て。うへの御前
そびに。宴(女二)の御かたり。御ことどもふえなどいざ
させ。ゆへが。おとゞ(タ)をもじめなりて。おまへにとりつ

つまいり給。故六條院の法まづらうきなりて。入道女
はなしを給しそうんのふ二巻。あえふの校をつけらる
をおとゞとりなりてそうし給。つぎくまゝ。さうん。さう
の法ことびハ。ゆゞんなど。朱雀院の物どもなりけり。
笛ハ柏木ノ笛ハ。夏よつてへしいましへれかたみのをまた
なきの物の音なりとめで。させなられば。これおりの
そうよりより。又ハいつかハとへぐ志きつゐでれあら
むとおぼして。そうで給へ物なりけり。おとゞゆゞ
ん。三宮琵琶。とりぐまなふ。大将れ法笛ハ。ゆふぞ世
まなきねのうぎりハ吹こて給ける。殿上人の中ま
も。さうがよつきなりしぬどもハめし出つて。いとか
しろうあそぶ。宮の法ならより。ふぎくまいり給。

もしろうあそぶ。家(カニ)の作りたるより。ふぎくまいり給。
ぢんのかしき回(ふ)。志ろうつき。ふぢのむらごれ
うち志きまおりえぐぬひたり。志ろ〻〇のやうだ
ありの作さらづき。屋ひじ。ハこん当りなり。兵清(ひげ黒ノ息之)稽
作まうちひつりまいり給。作さう月まいり給。
おとゞ(タ)志きりてはびんなうべし。こやこちの作
中まゝさ清べきもおかをねば。大(薫)ねまゆげ里き
そ給を。(薫ノ)そゞかり戸ぬへど。作(今上ノ)気色もいゞあり
けん。作(薫ノ)さうづき作くぞて。をしとの給へ法こは
づひもてなしさへ。例の大やけごとなれど。ひと
まゝぞこゆりを。ゆふハいとゞみなしさへそふまや

あらん。さし返しぬりて。かりてぶらうしぬ人
家など。いとこぐひなし。ぶらうれみえこちぶ臣
などの給ひりぬふぶる。めでこそさるなるを。これハ
ましてはむとまて。もてもやされてまつり給へ
ば。はおぼしをろかなるしばめづらしきよ。うざりはれば。
くぶりなる。雁まへりつゝ給ひ。心ぐるしきまで
なんえしけり。おぼちれ（石掛太臣之）大納云ハ。我こそかゝ御めもえ
むとしらず。ねこのわざやとしひぬ給へり。これ
（女二）えやの御ちく女（苗つぞ）はなぞ。むかしこころかけきこしの
へりかはと。まいりぬてのちを。なをおもひなるれぬ
さ後まゐらしかよりしなどし給て。ぐてそ（女二）なをえ

きさんのころつきこえけれバれうしかきのぞむ
くしきさもしやけれど、今上ノこゝもしめしごさまつゝへ
ぞるりまくれバ、紅梅ノいとうこころやましとおもひて、人がらい
げまちらぎりことあれど、あまり時のみかどのおぼく
おぼろくきこえまでむことうしづきこし給べきさま
よあじうしごとのへのうちにはおほしまし敷ち
きこ給ひて、うへ人のうちをけさやかにひて、くそへハ元妻
んやるまゝやとゞまそきはゞ豪しるすハあとゞ、いらぶう
そしてまつぶやきこゆおけれど、きすゞまゆめしくれバ
まゐりてこころれうちまぞもうぶちめ給ふ、きこく
さして斉どゝまちめ、がんぶひのまとまよりつゝ、ぞく

ほどのかしきはそのくしたりがほなりけれぜ
地例乃いりまあやしげまかるめいたりけんとおもひ
や逢バおるぞちまこるもたづねかぜかみのまち
を上らうとて此くらつきどもいことなるまゐて
ざめれど志るしぞりとてひとりかたつぞそひき
きたりし。これハ芸ねの君乃おりて此かぎしおり
てまいりぬへりかるとる
芸まべらぎのかぎしまおるとかぢ此花をよがぬ
えぎは袖かけてぐり。地うけぐりたるぞよくきや
金よろげせとかけてまほさん花なれバかふとも
けるぬきとこそこれまゐるなれとる

君がしためおれ家かぎしハしりさきの雲より

君がしめおれがくぐしいむしつささきれ雲あり

ととらぬきるれなしきり

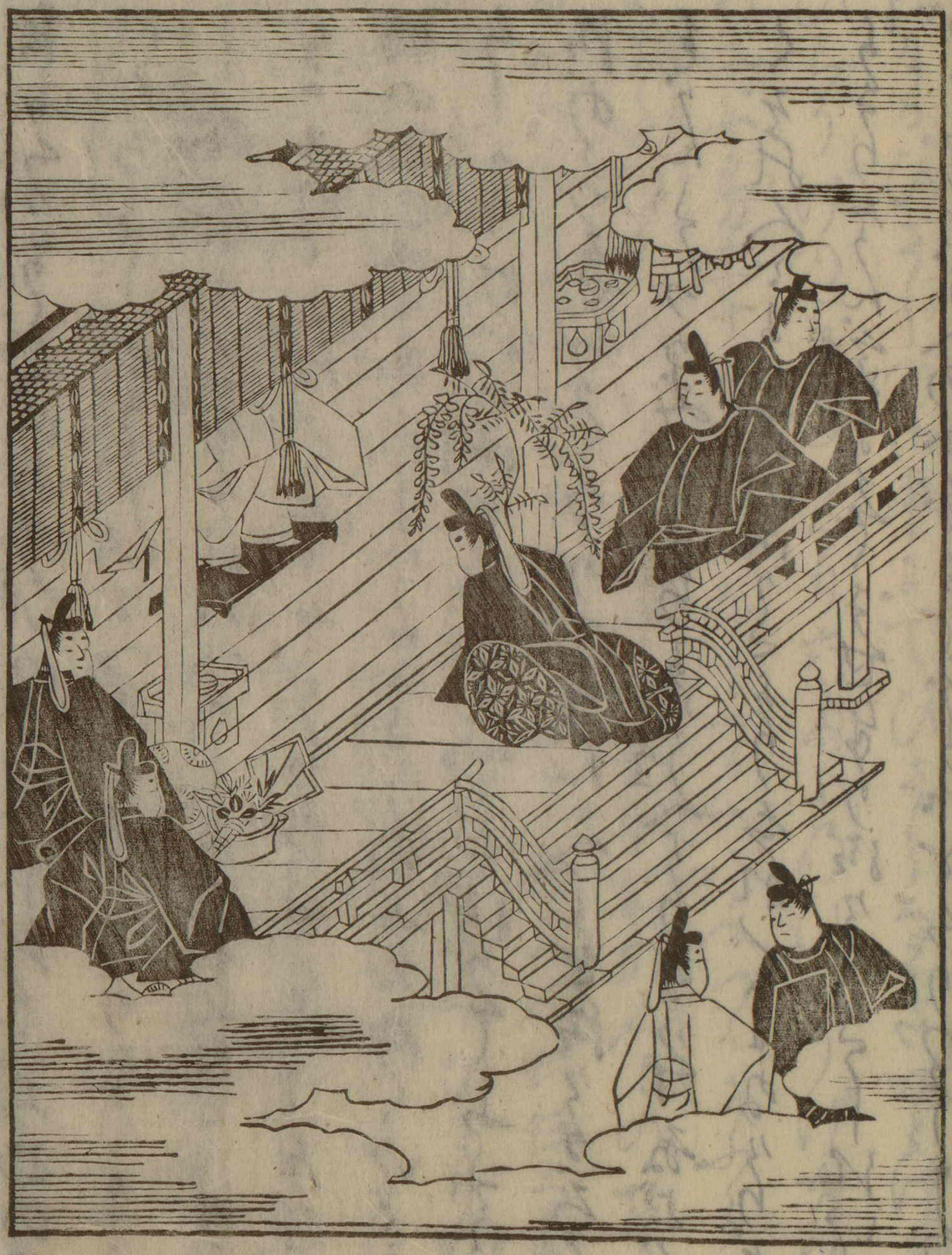
（紅梅）よれつるのいろともうしず雲のまでくち乃

がりなる蓊ちるれりれ。これやこれりしぶる。（紅梅）犬細くこれ

なりきなんとこそこゆれ。なさへいひがことまもやあり

なん。かやうまことなるおうしさふしをおくのこぞ

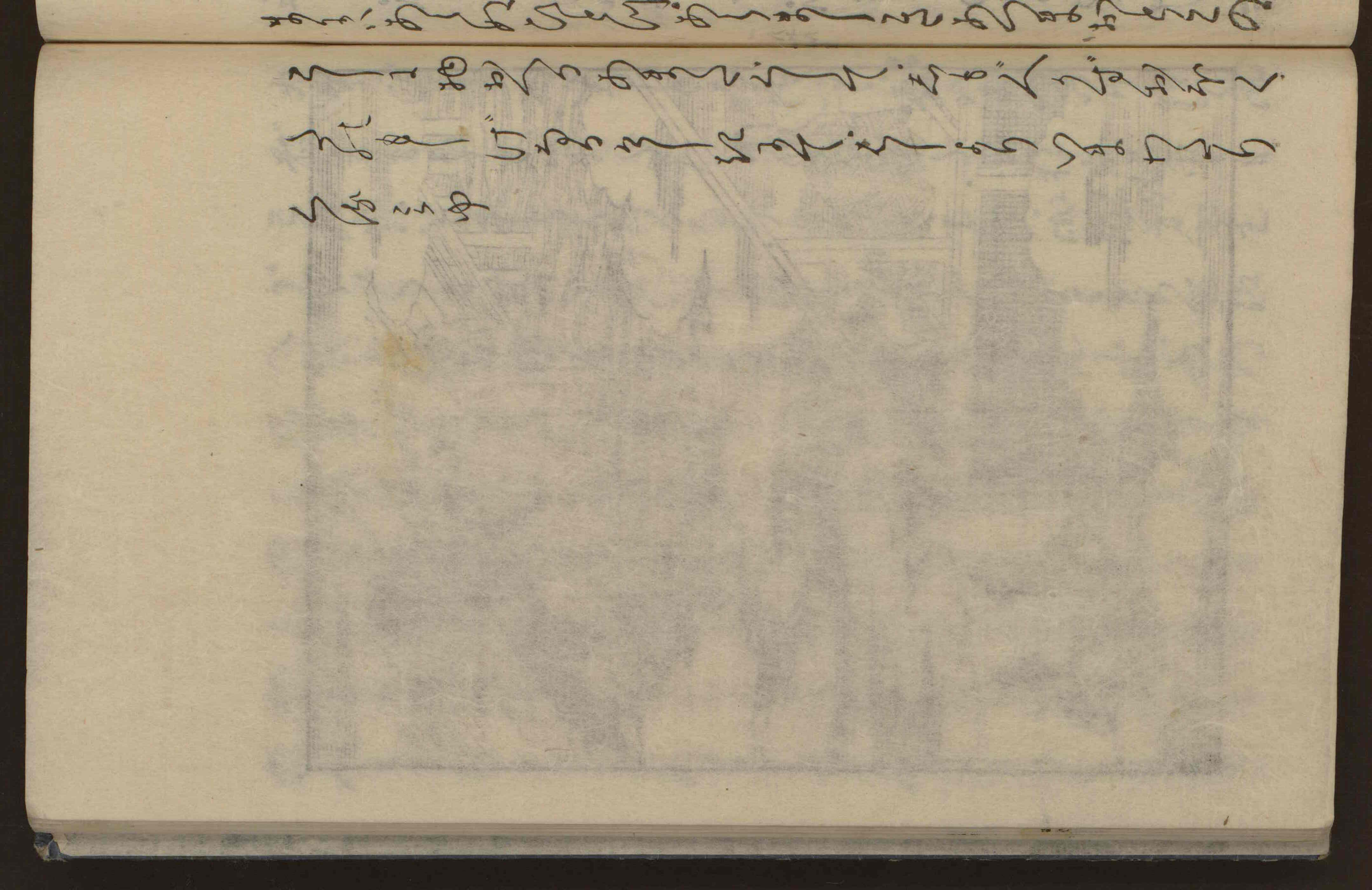
あるらし



我ゆゑまゐる。法あそびいとおもしろし。大(恵)ねの君
れ。あるしうとうしひなへ法こゝ。かぎりなくめでこ
し。按(和梅あぜち)察も著まぐれ給へりし法こゝのなぐりなれば
いまもいとも此くしうてうちあはせなへり。左の(夕)
同い殿の法七郎。わらはまてさうのゆえ姉くいとうろ
ちしかりければ。法(今上)ぞ給はす。おとゞ(夕)にりてぶらし
給。あるつきちくなりてなんへらを給はる。ろくど
を。かんぐちめ。みとしちまは。うへ(今上)よりなはす。殿上人が
くそれ人どまは。家(女二)の法かたより志れぐまなはり。それ
よきりなん。家(女二)まゐでさせなり給はる。ぎしれいとん
しとなり。うへの女房さなぐら法とくりつうまゐらを

給ふる。ひさしの御車にて。ひさしなるさいとげ三。
びらうげのこがね。づくり六。あぐ乃びらうげ女。あし
ろ二。女房三十人。かゝらハ志もづゝへ八人でさふらぬ
ま。まゐ（蓋より）さむへのいぐし車十二。本（ゆんぞ）一和の人（蓋ノ方を云ヘ）ぞのせく
なんありける。御とくりの上ぞ了殿上人。六位なぞ
いふ。かぎりなうきよらをつくさせなへりけり。かく（蓋ノ）
て心やすくうちとけて見たり給ふ。いと（女二ノ）おかし
げにおはせ。さぐやかなあてにしめやかにて。こく
ハとこゆるところなくおかすれバ。すく（蓋ハ）せの程くち
おしかりぐりけりと。こころとどりとらぬ抱かる。
すぎ（大ノ）にしかるのにすられバこうハあらぬ。なをま

ぎゆくおりなく。地のこゝ恋しくおがゆれば。これ世
まてハなぐさめかゝ。つべきわざなめり。かとけま
なりてこそハあやしくつらかりけるちぎりの程を。
何のむくひとなきこゝめて。おもひなれ是めとおも
ひつ。寺のいそぎまのこゝろといれぬへり。かも四月ニ
まつりなどさはがしきほどなして。女よ日のかど
ま。例のうぢへおもしろ。つくらを給ふぐうみなて。
すべきことゞをさきての給などして。さて是いの
宇治く家ニ弁ゟ方を云ニ
くち木のりとをこ給ひすぎんがな我あれなれぞ。
そなたざ後まおりすなよ。女車（うきゑ）のことくしろさ。
まもハあしぬひとけあらましきあづまおとこの
こしは地おへつあまたくして。しもべかずおかく。



[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゐ中びとう拘りるとみ給つて。殿(芸)ハまづいり給て。此
前どもなどハまぐだちさうぎたる程に。此車も
これ家をさしてくるなりかりとこゆ。此(こ)隠(ずいだん)分どを
がやぐといふを(芸ノ)せいし給て。なよ(詞)ぐとさせ給
へバ。こゑうちゆがえたるものひたちのどんじ殿乃
姫君の。ぐつを此法寺にまうでくうのへるなり。
そじめもてこまるんやどり給へりしとまに。おい(芸ハ)
や。さてし人なのしりとおぼし出て。人ぐをバことう
しまうくし給て。ぐや(芸ノ供人詞)此車いれよ。こてにまるひと
やどり給へど。ぬおもてになんといふせ給。此(芸ノ)とを
の人もこゑかりぎぬすぐるまてことくしうら

ぬすびとどもあれど。あふなげにひやしうちむげ。
づらしげにおそてあかめしまどをひきさけなど
しつゝうしこまりつゝぞとる。車ハいれてらうれし
しのつまなぞよすう。これきんなかまでおしいは
てすゞれをうけぞ。おそろしこあうる中の二まあり。
あてへぞそたづきうじれおはすありのぞき給ば
ぞれあるれぞ。めでさとさきてあとしさうめかさ乃
りぞかりとさきてずおりすう。さちつのもおりで。ひめま
君はとりそこしてやかてやんごとなげ人のお
ちすうとこれぞあるはあるいすうたつべし。聟ハ車
をとこれとさて給へ給ようゆ。めみれひとまある

ありとの給なとまゐりくちがこめさせ給てげれど
こなさ心えてぞやおりさせ無まへまらうとはもれ
しこまへどことくこまなんといえせたり（うき弁ノ供）ゆうさ
人のあゆまゐおりでず（車ノ）ぞれ打ぬぐめり法前ぞもれ
さゆりはこのおりとなれてめやすし又おとなび
こゆ人いまひとりおりてぞやうといふまあやしく（うき弁詞）
くあらはなるゆらしそすれといふしまゐのかなれ
どいとなてやうまゆゆ例（供ノ女詞）の法ことこゝろこはゆき
ざきもおろしこめてのこゝそは侍めれぞそは又
いづくのあらはなるべきぞと心をやりていふ（うき弁）ゆうま
しげまおるをこれば（惹ん）まづうしらつきやうだいや

うやうにあてなる程ハいとよう出(大にあたる)でられぬべし。
あふぎとつとさしかくしたれバ。ほ(ハ)ほハえしぬ程ころ
もとなくて。じ○うちつぶしつゝ見給。車ハたかく
かるく而ハくだりたるを。此人ごハやしらかにおり
なしつるを。いとくるしげにやゝ見て。ひさしく
わりてぬぎりいる。こきうちきにすでしことわ
ぼしきかそなるが。ゆるへいろのこうちききたり。
四尺(しやく)の屏風(びやうぶ)と。これさうじにそへてたるが。か
みよりこゆるあなたれバ。のこるべくもあらず。こるこ(うさ氷)
とバうしろめたげにおひて。おなさざ海にむさて
ぞ。そひかしぬる。さもころぐるしげにおいしまし(供ノ女訶)

つらくればづゝ河の舟わたりは。まことにかはりておもふ
ろしうこそありつれ。この二月には氷のすくなかりし
くばりやうしなりたりけり。いでやありさまは。あづまぢと
おもへば。いづこもおそろしかるむなぞ。かつらしくて
くるしとも思ひこそばいとひぬべかるを。きうりわれをとらせ
でひきわたしけり。かひあるとさしいでうろがまゝら
なるおかしげなるかどもびらちかなどいふべくをみ
えずおもしとなあてなり。やうくこういそさまで
さらすくみのへど。人のけものひそぞとぞおなどう
ごうでら給は。ワくさ人あなうずしや。いらうでさ
かうれかこそすれ。おまえ君のしさ給はやあなんと

いふをいふひとりの女げまなるめでこれ柏のうや
京人もなほいとこそこやびかるいふめりしけれ
天下(あんが)はいうじきるすとおぼしたりしかど あづま
まてかゝかたきものゝかえありせ出ぬはざりきう
……これ尼君(あま)のそまぬはうくいとうすうるおはすれ
どさうぞくのあらまほしうよび色あをゑと以
ぜいとさうらはぞあなやなどなめぬらり あな
これすのこよりひらはきて はゆなどまいりせ給
へとて おしきどもとりつゞきてさしいるくぐ
もれとりよせなどして もれけ給ふ これなどれ
こせどおどろ(うきみ)ひがふたりしてくりなどやこの

おほやけ。わろくとがふもなきてきこえぬかたちはひかるにハ
らいてしづみきみへど。又ゆうしくありつるを
うちよろしく。ふる舞。これよりまさりきけれ人ぞを
まさいの家をもとめてつゝしとまでうちよ
これも心あてなるをもつゝらあくまでこゝろしかゝ
べきれど。おぼろげならではめゝたんかもとでまう
ず。おもう人はまどひかくまでもわし流ゝん
ちまかくていまいわのまだかりすずくれてこゆかしとを
あさき人なれど。かくうちさりがてをおかしらう
ゆうしきも。いとおやしき心あり。持ま君いこれ散
のれうとみまはれをうそこここていつしうちみれど

黒ノ此心ちなやましとて今の国どうちやまませなへる
なりと此とも此人ごころしらひていひこりそれぞ
これ君（弁ゐ）をうぢねまほしげにおぼしの給ひしかば
うらはつゐでに。もれいひふれんとおぼしまよりて
日をくらし給ふやとしてうくのぞき給らんとは
しらず。例のこうきうのあげかりどもれまいれる。まゐ
ごやなまやとこゝるにまもいれうるを。あげまぐども
まをくもせなどことどもをこなひなさてうち
けさうじて海（うさ弁ゑ）らうとのうちにきこり。なめつるさう（弁うるうこ）
ぞくげにいとかがらかにて。こめを為紙よしくし
くきこゆげにぞある。弁詞ものふおりしつまなんとまち

きこしさせしを。なぞかそふも日こけていといふめれ
ば。此老人いとおやしうくるしげ（うきぶ）のこをちせ治つれ
ど。きのふはこのいげこ何のわたりまとじまりて。けさも
むごまはんちゝめらひてなどいへておこをば。い（うきぶ）
まぞおさぬらる。河（弁）ま君をもぢらひて。そだこゝろ
うゝちゝめ。これ（蓋ん）よりはいとよくこゆ。まことまいと
よしあるまゝ兄のわどゝ。うんざしれわたり。かれ（大ノ事）をも
くりしくつくぐとしもみなはざりしはかほなれ
どこれ（うきぶ）をこゝろにつゝそ。こゞそれとしひ出らるゝま。
例の波おちぬ。おま（弁）君れいへうちもろこ忍けひ
乃かれかなれど。家のはかゝ（中）にまもいとよくまゝろと

きこゆ。家ちりかう人かれ。かくるゝかうもれ(こ)をいまくで
こぶねもしらでゐしかうるよこれよりくちおし
かんきかれしちるしらんゆりまてぶよかぶりかよ
ひきてしらん人をしてハなをろかまえおもふまじ
きふちすうよましてこれハしられしてまつらざり
かれど。歯ことよ。ね(ハ)家の法子よこそハありかれと
こちるし。治てハかぶりちうあもれようれしくおぼし
治。こゞ今ももひよりて。世中よおり(大)しかうもれとと。
いひなぐさめまほし。おうらいまでこぶりて。かんざ
しかぶりをつくへてこゝのかんみ(玄宗ノ事)どハちる紙いと
いぶをかりかん。これハこと人なれどちぐさめ所あり

ぬべきさ海なりとおぼゆるは此人にちぎりおかし
なるにやあらん。尼君(あま)は抱ぐらすうしまてとくいり
ぬ。人(弁ム)のとがめつるかほりとぢくてのぞき給なめ
ことゝろえてがれぞ。うちとけずもかゝらいぼ
ちりぬる如べし。日もくれもてゆけば。君(蓋)もやをら
出て。此ぞなどき給てぞれいめし出るさうじご
ちに。おまぎめし出ぬて。おりさ海などとひ給。おり(蓋詞)
志もうれしくまうできあひこゝろを。いるにぞかれ
罪しことはとのゝ人は。志(弁詞)かおほをぞ侍し後は。さる
べきついで侍らばとまち侍しに。こぞはすぎて此
二月になるん。さ川をまうでのこゝろに多いめんし

て侍し。それたる君はおぼしめしつろき夜はかの（うきたか母ノ母之）
めし侍しかば。いとくるしくくるしげなるさ
ほよそへまこうは侍るなれとなん侍しかど。それこ（女二ノ宮え）
ろおとひいのどやかなるもおりしますずとうけ給はし。
おりびんなくおもひおへつるてたかんかくなどとも
きこえさせ侍らざりしを。又これ程ままうまで
て。さふらへりしまゐる有りけり。へりれ中やどり
まゐらうむつび侍るも。きこゆる事しれけるひとつ
ねがひしらるてゆくはなん侍めり。それ母君はさるこ
とおぼえて。このよびはひとり抱し給めれば。かくおそ
しますと。もなまえ抱し侍らんときこゆ。おほせび（葉門）

ふる人どもは思ひやつれたるありきもえしと
て、ぐらぐらめつれどいくじあらん。げそどもいかれ
あらじかし。さていくじすべき。ひとり抱し給らん
こそ中々こころやすなれ。うく整りふくてなん。
まいりきあひたるとつゝ給へしとの給へば。うち 年詞
つけよいつのほどなるはちきりまうけとうちつら
ひて。さらばしろつゝ給らんとているは
慧 月 鶯れ思もきくしまかふやとしげ
ふをつきてくふぞうづぬる。こゝはずさゝのやう
まの給をいりてくるりきこてくり。

69038
6AP78